



御購入ありがとうございます。

この作品は『NARUTO』の2次制作です。

性的な内容の為、18歳未満の方は閲覧いただけません。

御覧頂いて生じた問題に対しての責を負いかねますので、あらかじめ御了承ください。

無断利用、転載等はお控えください。

作品の内容は全てフィクションです。

実在の個人・団体・場所等とは関係がありません。

## 目次

### その1

日向 ヒナタ  
(無意識行動：悪戯)

日向 ヒナタ  
(無意識行動：レイプ)

夕日 紅  
(誤認：擬似授乳手扱き)

### その2

テンテン  
(常識変換：悪戯)

テンテン

(常識変換：和姦)

山中 いの

(睡姦：悪戯)

山中 いの

(睡姦：レイプ)



テマリ

(誤認：悪戯)

テマリ

(誤認：和姦)

日向 ハナビ

(操り人形：悪戯)

日向 ハナビ

(操り人形：レイプ)

## その4

みたらし アンコ

(感覚変化：フェラ・逆レイプ)

春野 サクラ

(誤認：悪戯)

春野 サクラ

(誤認：和姦)

## その5

夕日 紅

(擬似時間停止：悪戯)

夕日 紅

(擬似時間停止：レイプ)

日向 ヒナタ

(意識誘導：悪戯)

日向 ヒナタ

(意識誘導：和姦)

## その6

シズネ

(常識変換：フェラチオ)

シズネ

(常識変換：和姦)

綱手

(無抵抗：悪戯)

綱手

(無抵抗：レイプ)

## その7

春野 サクラ

(常識変換：手抜き・飲精)

綱手

(常識変換：和姦)

春野 サクラ

(常識変換：和姦)

後書き

全ては工口のために！

pixiv 109018

## その1

小説に限らず、大人数のキャラクターが出る創作物において、語尾が特徴的なキャラが出る事がある。

よく知られている例で言えば、お嬢様設定のキャラが語尾に付ける『～ですわ』

漫画と違って文字でしか表現できない小説では、台詞の後に『～と、誰々はこう言った』と言う様な誰が喋った旨を書かなくても良いので凄く便利な設定だ。

最初に説明してしまえば語尾に『ですわ』を付けるだけで、誰が喋っているのか簡単に分かる。

しかし、俺は常々思うのだ。

『これって最後の文字をローマ字にすれば、ラッ

プにならないかな?』と……。

「できでさ、この間の任務はさ、俺の活躍で達成したんだ」

「ナルトも下忍になって頑張ってるんだな」

「えへへ～、当たり前だってばよ！俺は火影になる予定の忍者だからな！」

そう、例えば『～だってばYO!』とか。

これに<フレミングの右手の法則>と<フレミングの左手の法則>を当て嵌めれば完璧だ。

フレミングの法則とは物理学の分野だが、大事なものは手の形だ。



親指と人差し指、そして中指を互いに直角に伸ばす事で表される。

薬指と小指を握った状態で親指を上、人差し指を前へ、中指は内側へ真っ直ぐ伸ばすのだ。

そしてフレミングの法則を表した手を内側へ九十度傾ければ、ラップの準備が整う。

後は中腰になって、喋る度に軽い屈伸を繰り返してリズムを取れば完成。

「YO！ YO！ だってばYO！」

火影に呼び出された俺は、屋根の上を飛び歩きながら口ずさむ。

先ほどチラリと見えたのは目出度くアカデミー

を卒業し、下忍となったくうずまき ナルト>

言わずと知れた少年漫画『NARUTO』の主人公だ。

恩師のイルカへ自慢気に任務での活躍を自慢していた。

周りの通行人はナルトへ封印された九尾への憎悪で、騒ぐナルトに眉を顰めている。

忍者として優秀なイルカは当然気が付いており、喜ぶナルトを傷付けない様に行き付けのラーメン屋へ誘っていった。

ナルトの活躍を紙面で読んでいた時から思っていたが、主人公とはかくも不幸な存在だ。

前世では漫画の中の出来事として、主人公のキャラクター性を引き立てる要素となった村人からの迫害。

元々何とかしようとは思っていないものの、それが実際に目の前で行われると幾ら俺でも流石に良い気分はしない。

そもそも、ナルトと同じ下忍に成り立てのヒョコ子で、〇〇でもある俺に出来る事など無いのは明白。

幾ら前世からの知識や教養があっても、出来ない事は出来ないのだ。

変に口を出そうとしても『所詮はあの時の酷さを知らない〇〇が何を』と、必ず失敗するだろう。

だから慣れない事は安易にするべきではないのだ。

例えば、慣れていないのに屋根を走っている途中で考え事をするとか。

「うおっ！？」

下忍になったと言う事で忍者らしさを求めた俺は、よく見る屋根を走る忍者特有の移動法を実践していた。

しかし案の定と言うか、その最中に余計な事を考えていると、シツカリと踏んでいた筈の屋根で足を滑らせてしまう。

途端にバランスを保てなくなり、斜めになった身体を支える為に伸ばした腕は何も掴めず、俺は家と家の間へ背中から落ちていった。

「ぬわあー！」

重力に逆らえない人間が落ちれば地面へ近づく時間は一瞬で、あっという間に背中から地球へ体当たりをしてしまう俺。

ドンと大きく鈍い音が身体の中で響き、背中全体に土の感触と共に痛みが襲ってきた。

「背中痛っ！？」

「うわ！？」

ブリッジをしながら背中からの痛みを逃がそうとしていると、近くから女の子の驚く声が聞こえてくる。

内臓にすら響いた衝撃を、何とか身を振って耐える事に必死な俺は周りを見回す余裕は無い。

「あの、大丈夫……？」

「あがが……、だ、大丈夫……」

それでも僅かに余裕を取り戻して、心配そうに掛けられた声へ何とか答えて相手を見れば、巨乳が真っ先に目に入る。

流石に初対面で胸をガン見しては失礼だと思い、慌てて顔を見上げた。

「あれ？」

「何ですか？」

見た事のある顔を認識した俺は、たいして考えもせずに名前を確認してしまう。

「もしかして、日向ヒナタか.....？」

「えっ、うん。そうだけど.....なんで名前を？」

何でも何も、そう言えば同級生だ。

この世界に転生した俺は、原作主人公であるナルトと同じ歳。

前世では普通にブラック企業に勤める社会人だった俺は青年の身体から、思春期に入るかどうかの年齢まで若返っていた。

常にだるかった大人の身体に比べれば、少年の身

体の何と活力の溢れる事か。

「覚えてないのか。俺とは同級生だけど」

「えっ！？ ご、ごめんね……」

いつもナルトを見ていたヒナタには、話し掛けも  
しなかった俺は記憶の外に居たのだろう。

同級生であった事を知ったヒナタは申し訳無さ  
そうに顔を伏せ、頬を赤くしていた。

しかも、内気な性格は動きにも現れており、精神的  
に相手との壁を作ろうと両手を胸の前へ上げて  
握り合わせる。

脇も締められた所為で二の腕に押された、今の時  
期でさえ大きな胸は服の中央で深い谷間を作っ



た。

「いや、良いよ。別に気にしてないから」

「う、うん……」

やっと背中中の痛みが引いた俺はパッと立ち上がって背中中の土埃を払う。

ヒナタからは気まずそうな視線と雰囲気を感じるも、今は相手をしている余裕は無い。

「んじゃ、俺はちょっと行かないといけなから」

「あっ、うん、またね」

「ああ、またな」

小さく手を振って見送るヒナタの視線を背中に受けつつ、俺を呼び出した火影の下へ急いだ。

△

「YO！ YO！ だってばYO！」

「.....なんじゃ、入ってくるなり」

先ほど思いついたラップもどきを歌いながら火影の部屋へ入ると、呆れた様な視線に出迎えられた。

さして広くない部屋の一番奥にある窓際の机には、火の文字が書かれている帽子を被った老人が座っている。

火影の里の長である<猿飛 ヒルゼン>その人だ。

かつてはプロフェッサーと呼ばれる程の天才忍者だったが歳には勝てず、現場から離れて長い事もあって実力自体は落ちているらしい。

「YO！ 火影様！ 俺に何かYOかYO！」

「.....ひょっとしてナルトの真似をしておるの

か？」

「そうだYO！」

「いや、もう良いから普通に話せ」

「.....分かりました」

流石にいつまでもラップもどきをしていては話も進まない。

そもそも、俺は呼び出される心当たりは無いのだが.....。

「ふむ、今日呼び出したのは他でもない。お主の班の事だが.....」

「ああ、そう言えば.....」

アカデミーの卒業試験が済み、主人公組みを始めとしたキャラ達が班分けされる中で、何故か俺だけが特に何も言われなくて帰宅を許されたのだ。

しかも、特に任務を押し付けられる事すらなく、本当にアカデミーを卒業したのか怪しくなっていた所だった。

余りにも下忍としての仕事を回されないのので、聞きに行こうと思った矢先に火影からの呼び出しを受けた次第。

「その前に聞きたいんじやが。お主、体術の成績と忍術の成績がかなり悪いのじやが何故かの？」

「それが実力だからですよ？」

「それにしては座学に関しては春野に迫る勢いだったではないか」

それは当たり前だ。

忍者のアカデミーとは言っても、所詮は〇〇の学校だ。

高校を卒業した俺にとっては簡単過ぎる勉強内容だった。

忍術に関しても興味があったので積極的に学び、座学に限定すれば成績は上位に食い込んでいる。

その一方で体術に関しては、それこそ前世の体育レベル。

そもそもチャクラを使ってとか意味が分からないので、肉体の強化とか意味不明だ。

瞬きの瞬間に相手へ近寄るなんて、無理無理。

忍術においては、何が原動力でどう出すのかが分からない。

言うは易く行うは難し、と言った感じ。

「体術は苦手なんですよ。いくら理屈が分かっても感覚が掴めないとどうしようもないです」

「……まあ、そうなの」

猿飛ヒルゼンは天才忍者だ。

里の忍術全てを解明したとも言われるので、俺の様な凡人の考えは理解出来ないのかもしれない。

若干納得していない霧囲気の火影だったものの、

これ以上の情報は引き出せないと思ったのか、怪しむような視線を消して一枚の紙を取り出した。

「ほれ」

「何ですか？」

「お主の班分けじゃ」

「はあ……」

手渡された書類を見てみれば、火影の言う通りに班分けの事が書かれている。

しかし、内容が問題だった。



「あの、班の名前が一杯あるんですけど」

「そうじゃ。お主には各班を回って貰おうと思っ  
ての。言うなれば遊撃要員じゃな」

「何ですか、それ？」

「ああ、実はな、人数が余ってスリーマンセルが  
出来ないから苦肉の策じゃ」

詳しく聞けば、人数が余っても他の班が大なり小  
なり名家の子息ばかりで、普通極まりない血筋の  
俺を入れるには何かしら不満が出るんだそうナ。

本来なら、成績に基づいて班の全体的な能力が平  
均になるようにする。

優秀だったサスケと、ドベだったナルトを同じ班  
に入れ、更なる能力値の平均を保つ為に平均的な  
成績だったサクラを入れた時の様に。

しかし、俺は座学を入れても、成績としては平均より下だ。

体術は勿論だが、忍術にしても成績は良くない。

なので、何処の班に入れても平均的な能力が下がってしまいうらしい。

「そこで苦肉の策として、お主には班を渡り歩いて貰おうと思っただの」

「一箇所に留まらせない様にして、名家からの突き上げを誤魔化すって事ですか」

「済まんの」

「いえ、別にそれは良いんですけど……。休みとかはちゃんとあるんですか？」

「ああ、それなら大丈夫じゃよ。班の任務が終われば、同期ではお主だけ二日か三日程度の休みを取らせるからの」

「それなら安心ですね」

班の任務を終えて帰ってきたと思ったら、違う班に呼ばれて家へ帰る間もなく、また任務に行く事は無さそうだと安心した。

一先ず任務で過労死する危険は無さそうだ。

そして、俺は紙を見ながら最後に残った疑問を火影へ投げかける。

「最初に行く班が一番上に書いてある所で良いんですよね？」

「ああ、そうじゃ。下まで行ったら、また上から  
と言う具合で頼むぞ」

「了解です」

「聞きたい事は、もう無いかの？」

「ええ、とりあえずは」

「なら、行って良いぞ」

「分かりました。失礼しました」

「うむ」

火影の部屋から出た俺は早速最初に合流する班  
が居る場所へ移動していく。

建物を出てからは忍者らしく屋根の上に飛び乗  
り、そのまま走る。

普通の身体能力しか持っていない俺が屋根の上に飛び乗れるのは、ひとえに転生して手に入れた能力『フィールド』のお陰。

このフィールドは、俺以外に見えないドーム状の場を任意の場所に好きな大きさを展開できる能力。

展開すれば地面を基点としたドーム状の膜が広がり、広がる反発力を使って屋根まで飛ぶのだ。

言ってみれば、何処でも出せるトランポリンの様な物。

膜の耐久性は俺が乗って跳ねても耐えられる程度で、それ以上の衝撃を受ければ弾けてしまって防御力に関しては無いに等しい。

忍術どころかクナイすら防げるかどうか。

他にもフィールドに入った者の意識や知識を好

きに弄れ、それこそ擬似的に時間さえ止められるが、やはり欠点はある。

まず持続時間が短く、長くて三十分ほどしか展開できない。

その上、フィールド内で誰かが『殺意』を持った時点でフィールドが強制解除される。

任務で何処かの忍者を始末するのは珍しくもないが、俺にはそれの全てが出来ない。

フィールドに捉えて動きを止め、始末しようとした瞬間にフィールドが弾けてターゲットが自由になってしまう。

再びフィールドに捉えようとしても、相手の殺意に反応して展開した途端に弾けてしまうだろう。

そうならば一般人レベルの身体能力しか持っていない俺では、精々が小刻みにフィールド内で動きを止めている隙に逃げる事しか出来ない。

それに引き換え、記憶操作は大変役立つ物だ。

アカデミーの試験では分身の術を教員の前でしなければならぬが、俺は忍術が使えないのでフィールドを使ってイルカ達へ『分身の術が問題なく使えた』と思わせた。

効果の程は問題なく、今も卒業を取り消されていない事から、変えた記憶は残り続けるらしい。

これを敵に使っても良さそうでも、そもそも平和な世界の人間だった俺に誰かを始末するなんて無理に決まっている。

「……ん？ あそこか」

フィールドを使って跳びながら街を抜け、森を暫

く進むとちょっとした広場に四人の人影が見えた。

一人は大人の女で、残りは背の低くて同級生っぽいので間違いなく目的の班だろう。

「話をすれば、丁度来たようね」

「やっとかよ！」

「……………」

「あっ……………」

最初に俺の姿を捉えたのは<夕日 紅>

第八班である紅班の担当上忍で、幻術を使わせれば里一と名高い実力の持ち主だ。



黒い髪は長く、肩を隠す程度まで伸ばされ、手入れをしていないのか癖毛なのか不明だが所々跳ねて纏まりが無い。

服装も反物をそのまま身体に巻いた様な形容しがたい服を着ており、右腕だけに赤い袖があった。

紅の言葉に釣られて俺へ振り返るメンバー三人も、原作では良く知った面々。

「遅いぞ！ てめー！」

「……………」

「やっぱり……………」

いの一番に文句を言って来たのはく犬塚 キバ

>

頬に赤い逆三角形の模様を描く斬新なメイクをして、パーカーに似た服装をしている。

毛皮みたいにふわふわしたファーの付いているフードも被っている所為で、貧相な黒いライオンみたいな外見だった。

ファスナーを空けた胸元には相棒である忍犬の<犬丸>を入れ、完全な部外者でもある俺へ僅かな警戒心が含まれる視線を向けてくる。

キバの隣に居るのは高い襟で口元を完全に隠した上に、サングラスを掛けている<油目 シノ>

虫を操る油目一族であり、寡黙の少年だ。

そして、最後は言わずと知れた<日向 ヒナタ>

屋根から落ちた際にも、痛みで悶える俺へ声を掛けてくれた心根の優しい少女である。

将来は湯に浮かぶ程の巨乳に育つものの、今ですら同年代と比べると大きい部類に入るだろう。

引っ込み思案で、相変わらず自分を守る為に胸の前で両腕を上げ、胸の谷間を深くしていた。

待ち合わせ場所へ俺が来たのを見た時は意外そうな表情を浮かべ、キバが喧嘩腰に声を掛けた事で申し訳無さそうな表情に変わる。

「待たせたようで」

「お前が紅先生の言ってた奴か」

「そうよ。この子が今回任務を一緒に行う護衛対象要員ね。余り体術は得意ではないらしいからそのつもりでね」

「分かったよ。先生」

俺が合流する理由は既に説明してあるのか、案外アッサリと受け入れるキバ。

先程見せた警戒はどこに行ったのかと問い詰めた気分だ。

遅れたから怒ってたのか？

シノは無表情だから良く分からない。

おずおずと近付いて来たヒナタは、事前に会った事がある分は人見知りや和らいでいるらしく声を掛けてきた。

「あの……よろしくね」

「ああ、足手纏いになるだろうけど、よろしくな」

「あっ、だ、大丈夫だよ。キバ君もシノ君も凄いし……」

「当たり前だよ。俺に任せておけば余裕だって」

「……そうだ。なぜならば俺達は攻守のバランスが他より良いからだ」

紅がどんな説明をしたのかは分からないが、なにやら好意的に受け入れられている。

ヒナタは俺に見られて顔を赤くしながらも微笑み、キバも好印象を受ける笑いを浮かべ、シノは良く分からない。

担当上忍の紅も俺達の会話を見て微笑ましそうな顔をしていた。

「それじゃ、早速今日の任務に行くわよ」

「いつでも良いぜ！ 先生」

「はい！」

「……………」

「了解です」

そして紅を先頭に俺達は任務地へ移動する。

道中では親睦を深める為にヒナタを中心として会話を楽しみ、ちょっとした遠足のような和気藹々とした雰囲気ですぐ目的地へ到達した。

たいして移動していないと言う事は、任務地は案外近い位置にあったらしい。

しかしそこで見たのは草が伸び放題の庭。

周りの生垣はある程度手入れをされているみたいだが、地面の雑草が明らかに長年放置されている様子だ。

「さて、今日の任務は草むしりよ」

「またかよ。先生！」

明らかに忍者がやるような仕事ではないものの、新人極まりないメンバーでは仕事の選り好みは出来ないのだろう。

それが明らかに、ただの便利屋としての仕事であっても。

「仕方ないわよ。貴方達はまだ卒業したての下忍よ？ 重要な任務を与えられる程経験も実力も無いでしょう」

「そ、そうだよ。キバ君」

「そうだ。なぜならば、俺達は卵の殻を被った雛だからな」

「ちっ、シノまで……」

血気盛んなキバに苦笑いを浮かべる紅が気を取り直すように手を叩くと、全員の視線を集めた。

「さっ、早く終わらせて、どんな任務でも迅速に終わらせる優秀な忍者であると分からせましょう」



「仕方ないな……」

「頑張ります」

「……………」

「了解です」

不満タラタラだったキバ達を上手く乗せ、やっと草むしりの任務を始める。

地面に座って雑草の根元を掴んで引き抜き、横へ置いていく。

見た目よりも力が要る作業は案外辛く、暫く草を筆っているだけで汗が滲んできた。

「んっ、ふう、……ん、硬いわね……」

「よっ！ ほっ！ はっ！」

「よいしょ、よいしょっと……ふう」

「……………」

紅を始めとした班員は真面目に仕事をこなして行く中で、俺は目の前にあるヒナタの尻へ視線を釘付けにされている。

ヒナタは地面に膝を付いて座り、少し体重を前に傾けて草むしりをしていた。

上半身を軽く曲げている所為で尻を覆っている七分丈のズボンは生地を伸ばされ、小さめの尻の形を浮かび上がらせる。

草を抜く度に体重が片方へ偏れば尻の肉が振る

え、少し前へ進む度に脚が踏み出されてシューズの線が見えた。

「……んっ！」

丸く形の良いヒナタの尻を見ていると、若くなつた俺の身体は当然のように興奮を溜め始める。

草を引き抜くと同時に庭全体を覆うフィールドを展開させた俺は、軽く四つん這いになっているヒナタへ後ろから近付いた。

作業に没頭している班員達は俺の動きに全く気を向けてこない。

フィールドの力でヒナタの無意識を誘導し、キバ達と少し離れた場所へ向かわせた。

辺りは立った状態では脛を隠す程度まで雑草が伸びているので、四つん這いになれば身体の大半は隠れる。

更にキバ達の集団から離れさせる事で、二人きりの状態を維持的に作り出した。

「よっ、よいしょっと……」

草むしりに集中しているヒナタも、自分がキバ達から離れているとは気が付いていない。

俺も後ろを着いて行っているので、目の前に健康的な形の尻が興奮を誘う様に動く。

思わず手を伸ばした俺は、ヒナタに許可を取る事無く尻を触った。

「んっ……しょっと……ふう」

俺に尻を触られた瞬間こそ動きを止めたものの、何も反応を示さずに草むしりを続ける。

アカデミーを卒業したてとは言ってもやはり忍者。

指に感じる尻の弾力は強く、同時に柔らかさも感じた。

少し力を入れるだけで指がズボンの生地とショーツを間に挟んでいても、尻の肉に指が埋もれていく。

そのまま揉み解してみれば、視線だけではなく直接的な興奮を受けた。

「よっと……ん、根っこが……」

四つん這いのヒナタはおもむろに手を腰へ下げ、さも手に付いた土をズボンで拭く位の気安さでズボンを降ろしていく。

俺が尻を触った事が切欠となるようにフィールドの効果を付けており、無意識に、思わず手を拭く流れでズボンを脱ぐようにしていたのだ。

ヒナタの意識は草むしりを上位に持ってきているので、他の事には一切気を向けていない。

無我夢中で草むしりを真面目に行いつつ、自らズボンを脱いで白いショーツを曝け出す。

ピッタリと張り付いた生地の下から丸い形を見せる尻に、股間へ張り付いている部分は大陰唇の

形を浮かび上がらせる。

クロッチの部分は生地が二重になっているものの、中心では縦に走る割れ目を確認できた。

四つん這いになっている所為で尻を覆い隠していた布は心成しか尻の谷間へショーツを食い込ませ、見える肌の面積が普通よりも多い気がする。

しかも、引き締まった尻の肉にショーツのゴムが食い込み、健康的でも卑猥な形に変わっていた。

無意識ながらも自分でズボンを降ろしたヒナタの手は止まる事無く、今度はショーツすら降ろしていく。

「あっ、やっと抜けた……、んっ、あっ、また、根が……」

片手での作業はやり難そうではあるが、根が張っている雑草も何とか抜いていくヒナタ。

ショーツのウェストを摘んで、ゆっくりと降ろされていく手はショーツのゴムが伸びても構わずに下がっていった。

そして、現れるのは白く綺麗な丸みを帯びた尻。

昼間の明るい光を受けて艶やかな肌を見せ、更にショーツが降ろされていくと遂に大陰唇が出てくる。

「ふお……」

「んっ……と！　　ここら辺は何か根がしぶとい……」



年齢的に陰毛が生えていてもおかしくは無いが、ヒナタの大陰唇は無毛であり、下腹部にすら毛の気配は無かった。

しかも、四つん這いになっているので尻の谷間は少し左右に開かれ、色素の濃い肛門すら見える。

ヒナタが雑草を抜こうと力を入れる度にキュッと括約筋が締まり、抜けると尻の緊張も解けた。

「.....水遁」

根の深かった雑草と格闘しているヒナタは小さく水遁の術を使い、土で汚れた手を洗う。

どうせ草むしりは続けるので意味は無さそうだが、綺麗になった両手の片方だけは曝け出された

大陰唇へ向かった。

細い指が大陰唇に食い込むと、秘裂が僅かに割れ目を広げる。

□

「よいしょ！ っと……」



掛け声と共に開かれた指が大陰唇を左右へ押し遣り、秘裂の中を俺の目の前で曝け出した。

桜色とも言える生々しいピンク色は愛液とは違う体液で光を反射し、殆ど閉じている膣口が開閉を繰り返す。

その膣口も肛門と同じ様に、雑草を掴んで引き抜くタイミングでキュッと閉じる。

小陰唇は余り発達しているようには見えず、淫核

を包む包皮も小さい。

ショーツから開放されたお陰で、少し動く度に白い尻が硬めに揺れた。

これ程までに恥ずかしい格好をしているにも拘らず、ヒナタは夢中で草むしりを続ける。

後ろか忍び寄った俺は念の為に持ってきていたハンカチを濡らしてから手を拭いて、開かれた秘裂へ指を触れさせた。

「んっ……んんっ、よっと……」

秘裂の中でスッと指を上から下へ走らせても、感じるのは肌が突っ張る感覚だけ。

見た目は体液で光っている感じに見えるが、殆ど

滑りは無いみたいだ。

大陰唇を広げているヒナタの指へ軽く触れつつ、指を下げて小陰唇を弄び、包皮に隠れている淫核を指先で引っ掛ける。

「あう！ ……う、ん、ふう……」

爪の先が軽く触れただけで腰をピクリと跳ねさせた所を見るに、性感帯を刺激されれば身体が反応を示してしまいうらしい。v 俺は人差し指で下から包皮ごと淫核を押し上げ、そのままグリグリと動かして強い刺激を送っていく。

「うっ……んんっ、土が、硬いのかな……？」

性感帯を刺激されたヒナタは快感で腰から力が抜けてしまい、雑草を抜く動きを悪くさせてしまった。

股間から来る未知の刺激から無意識に逃げようと下半身を浮かせれば、膝が地面から僅かに離れ、俺の指一本でヒナタの下半身を持ち上げているように見える。

その状態でも指を左右へ小刻みに動かし続ければ、ヒナタの手によって開かれた秘裂の中、小さく開閉を繰り返す膣口から徐々に愛液が流れ出してきた。

雑草を抜くタイミングとは違った間隔で膣口は締まり、その度に流れ出す愛液は俺が押し上げている淫核の方へ落ちてくる。

「くっ、ふぁっ……んんっ、しょっ、ひっ、……  
と」

指で押し上げる淫核が愛液でぬるぬるになり、俺の指にも硬くなっていく感触があった。

同時にヒナタの腰も痙攣を始め、声にも嬌声が混じり始める。

白かった尻は赤みを増し、見えている肛門も括約筋が頻繁に収縮を繰り返す。

膣口の動きは更に活発で、漏れ出す愛液の量が地面へ垂れる程に多くなってきた。

大陰唇を広げている指にすら愛液が付いてしまい、滑る所為で押さえていた大陰唇は指の下をヌルリと動いて元の秘裂へ戻ろうとする。

その度にヒナタは無意識に指を秘裂へ入れては

左右へ開き、滑って元に戻る大陰唇を再び押さえる動きを繰り返し始めた。

秘裂が閉じると淫核を下から抑えている俺の指にまで愛液が伝って、卑猥な香りを僅かに広げる。

「んくっ、エロいな……！」

「ふっ、ううっ……？ 根っこが、強い……くふっ……！！」

ヒナタの指が自分の股間を弄ぶ厭らしい光景が繰り返されては、俺の陰茎は我慢出来ないまでに興奮を溜めてしまうのは仕方がない。

ズボンを押し上げる刺激でさえ煩わしい感覚なので、高まった性欲を発散させる為、サッサとズボンを脱いで反り経つ陰茎を取り出す。

少年の身体に戻ってしまっても、陰茎だけは前世の形と大きさを保っている。

完全に剥けた亀頭では、既に鈴口からカウパー液を漏れさせていた。

「よっと、この位置かな？」

「ん～、しょっと……」

相変わらず草むしりに没頭しているヒナタの股間へ腰の高さを合わせ、そのまま前へ進めて亀頭を開かれたままの秘裂の中へ差し入れる。

「んくっ、暖かい」



「ふっ……うっ、ん～……抜け、ない」

性器の中に他人の体温を感じたヒナタはビクリと身体を止めるが、草を掴む動きだけは止まらず、思考も草むしりをするという任務にしか割いていない。

しかし、その事がヒナタの純潔を失う切欠にもなった。

中々しぶとい雑草と片手で格闘していたヒナタは、力を込めて引き抜く。

「んしょっ——」

「うおっ！？」

「——と、くうあ！？」

しぶとかった雑草を抜き取った反動は中腰で不安定なヒナタの身体を後ろへ倒させ、秘裂へ接触させていた亀頭へ体重を乗せてしまう。

小指すら入るかどうか分からなかった膣口は一瞬で拡張され、愛液の滑りで何の抵抗もなく亀頭を飲み込んだ。

一番張ったカリでさえも抵抗無く通り過ぎ、処女膜を一気に破った鈴口は生暖かい膣壁を広げていく。

滑る膣内であっても、狭い場所へ太い陰茎が挿入されてしまえば後ろへ倒れる勢いが削がれ、ヒナタの身体が止まった頃には既に竿を3分に1程が処女だった膣内を占領していた。

「んぐう……！？」

流石に膣口を拡張される刺激は強すぎるのか、草を筆っていた手で大陰唇を開いている方の腕を掴んで背中を丸めるヒナタ。

意識だけは未だに草むしりへ剥いているものの、無意識だけが痛みを耐える行動を行わせた。

陰茎を咥え込んだ膣内では突然侵入して来た異物を締め出そうと必死に膣壁を奥から波打たせ、亀頭の表面を流れる強弱の締め付けが繰り返される。

膣壁が拡張される感覚で蠢く度に愛液で滑るヒダが這い、陰茎の表面を舐め回すような快感があった。

「くう……んく、ちょ、ちょっと、根が強かった、のかな……うっ……！」

普段から儂く純情な姿を見ていた俺には小さく震える背中が愛おしく見え、思わず抱き締めてしまう。

ついでとばかりに性欲で操られた腕がヒナタの前へ回り、二の腕に左右から押されて縦の楕円に形が変わっている巨乳を掴む。

今の時点で俺の掌に納まらない大きさを持っている胸は、服の上からと言う事を除いても若干の硬さを感じ、成長の兆しをシッカリと指に返してくる。

肩越しのヒナタの横顔を見れば、真面目に任務をこなす顔に変化は余り見られなかった。

処女膜を一気に破られた膣内から来る僅かな痛みと、陰茎に拡張される違和感は、しぶとかった雑草を抜いた拍子に身体を変に捻ったと思ったのかもしれない。

握っていた草を離したヒナタは再び雑草へ挑もうと、陰茎の上に座っている状態から腰を僅かに引き上げて前へ屈む。

「おうっ！」

「ひぐっ……うっ……」

処女を失ったばかりの膣内でカ리가ヒダを削ればヒナタの身体へ痛みを送り、無意識に悲鳴が漏れた。

背中から抱き締めているお陰で殆ど動かないが、

拘束を続けて草むしりへ強く向いていた意識が後ろに居る俺へ向けられては少し困りそうだ。

しかし前へ行かれては折角入れた陰茎が抜けてしまうので、俺は処女の締め付けからくる快感に耐えながらフィールドへ効果を追加する。

即座に反映された効果でヒナタは上げようとしていた腰を止め、その状態で横にあった雑草を掴む。

そして、引き抜くと同時に腰を降ろし、抜けていきそうだった陰茎を自分で膣内へ差し込んだ。

「おくあつ！」

「んぐっ……広がる……。……え？ 何が、きう！ 広がるんだろ……？」

痛みと違和感で若干声が震えていた事には触れず、思わず出てしまった独り言の内容に自分で不思議がるヒナタ。

俺の太股から僅かに浮いている白い尻は抜こうとした時よりも確実に深く下がっており、竿に感じる膣内の暖かさも根元へ近付いていた。

根がしぶとい草を掴んで身体を落とさせ、処女の強い締め付けで入らなかった陰茎を更に啜え込む様にしたのだ。

身体を下へ引き寄せていた草が抜ければ、一瞬の間を置いて抜けた反動を持って身体が浮く。

そうすれば当然陰茎も抜け、膣壁がカリで削られた。

「おあっ！」

「あぐら……！ お腹が……！」

どれだけ膣内を広げられる違和感で声を漏らそうとも、フィールドの中に居る限りは上忍である紅すらヒナタの様子に気付かない。

抜いた草を捨てたヒナタは、もう一度横にある雑草を掴んで抜く動きと同時に腰を落としてくる。

亀頭は先程よりも深く膣内へ食い込み、竿は膣口を丸く形を変えさせた。

犯される刺激は淫核を弄っていた時に溜め込んだ快感で誤魔化されてしまい、生理的な防衛本能で愛液の量も増えていく。

草を抜く程にヒナタの身体が上下に動き、刺激を受けた膣口は益々愛液を流す。



ヌルヌルの感触が大きくなり、陰茎はキツイ締め付けの中でもヒダで舐められる快感で精液を沸き上がらせた。

小陰唇と同様に発達が少ない印象を受ける膣内は、カりに掛かる抵抗も少ない気がする。

その分、膣壁との密着は高められ、陰茎は膣内で密封されているような吸い付きを受けた。

ヒナタが腰を上げれば抜ける陰茎に膣口が張り付き、破瓜の血を滲ませる愛液が付着した竿が姿を見せる。

カリで処女膜の名残を完全に削り取り、鈴口の前では広げられた膣壁が、抜ける陰茎の後から閉じてカウパー液を舐め取った。

雑草を引っ張って腰を下げると、拡張したお陰で心成しか入れ易くなった膣壁を搔き分けていき、入らなかつた箇所まで亀頭が触れる。

生暖かい小さなヒダと膾壁が龟头からカリの凹み、そして竿を流れる感触は俺の大きな快感を送り、思考すら白く染めていく。

「うっ……うう！」

「ふっ、うあっ、くう！　だ、駄目……！」

フィールドの効果はヒナタの動きを徐々に早くさせた。

短い髪が俺の鼻先で揺れれば髪の中で籠った汗の匂いが香ってくる。

決して不快さは無く、逆に興奮を高める材料にしかならなかった。

快感に耐える俺も上下の動きを邪魔しない様に

腰を突き上げて、亀頭を未開拓だった膣内の奥へ突き進める。

握っていた巨乳も掌の中を波打ちながら踊った。

服の上からであっても乳首の尖った感触があり、破瓜の衝撃を抑える程度にはヒナタの身体が快感を溜めている事を知らせてくる。

上下に動く幅の大きくなれば、僅かな間も置かずに陰茎は根元まで挿入された。

竿は全て生暖かい膣内に包まれ、亀頭は子宮口を持ち上げる。

俺の太股にヒナタの尻が衝突すれば硬くも柔らかい動きで波打ち、心地良い重さと暖かさが感じられた。

膣口から漏れ出す愛液は破瓜の血を流し切り、膣内で陰茎によって掻き混ぜられた所為で白く空気を含む。

「駄目……。お腹が、何か、んんっ、変だ……。あ  
あっ……。！」

○い上に性格が引っ込み思案であるヒナタは、  
膣内から来る絶頂を恐れる心が身体を強張らせ  
ると小刻みに震えさせた。

膣内でも今まで以上に強く圧迫し、発達の少ない  
ヒダを目一杯陰茎へ押し付けてくる。

しかし身体だけは無意識に上下運動を続けてし  
まい、快感は高まり続けた。

興奮を溜め込んだ陰茎が締め付けてくる膣壁を  
広げ、その感覚がヒナタも絶頂へ上らせる。

「ん、あぁっ……！ な、何かが、お腹の中、から、うくう、来る……！！！」

ビクビクと自分で抱き締めた身体を痙攣させるヒナタ。

強張る下半身が内側へ脚を閉じさせ、膣内も陰茎を握り締める。

精液が上がっていた陰茎に、強くヒダが押し付けられる刺激は耐えられるものではない。

「くぁっ……うくっ！！？」

「ふっ、ふぁっ！！」

背中を反らせたヒナタは、身体を小刻みに震えさせながら頭を振り上げる。

快感を溜めて敏感になっていた陰茎に締め付けと激しい痙攣を受けた俺も、視界が白く染まってヒナタの背中が見えなくなる程の絶頂が身体を走った。

「出、くっ、出る……！」

掴んでいた巨乳を咄嗟に引き下げてヒナタの尻を俺の太股へ張り付かせ、陰茎を根元まで入れてから暴発しそうだった精液を開放する。

ビクビクと震えながら吐き出される精液は膣内の奥深くへ溜まり、体液の熱さを最奥で感じ取ったヒナタも絶頂へ達して身体を激しく痙攣させ

た。

「んあっ！？ な、何か、出てるう……！ お腹の、中で……ええ……！！！」

「締まる……！」

射精で繰り返す痙攣を止めんばかりに締め付けるヒナタの膣壁を搔き分けながら、射精を続ける俺の陰茎。

尿道を駆け上がる感覚と共に。絶頂の快感が頂点へ達する。

「あっ！ あうっ！！！」

「んくっー……！」

俺の太股の上で痙攣を繰り返す尻が動けば、絶頂へ収縮を繰り返す膣内で精液と愛液が掻き混ぜられていく。

子宮口に食い込む鈴口から射精は止まらず、快感と共にヒナタの胎内の最奥で溜まっていった。

「あっ……ああ……」

「ふくう……」

腰を前後に痙攣させながら絶頂へ達したヒナタは徐々に動きを静め、同じ様に俺も吐き出す精液の量も落ち着く。



白く染まっていた視界も色を取り戻し、反っていたヒナタの背中は力が抜けたようにゆっくりと元に戻っていくのが見える。

「ううっ……お腹の中が、熱い……」

「ふう……」

そして、俺とヒナタを襲っていた絶頂の波は消えていき、後には疲れを含む溜息が吐き出された。

「はぁ……今日の草むしりは、何か疲れるな……」

「くふう……」

自分の身体を抱き締めていたヒナタは未だに握っていた草を離すと、横に抜けそうな物が無かった為に少し離れた箇所草を掴もうと身体を前へ倒す。

そうすれば俺の股間の上に乗っていた尻は自然と上がり、根元まで入っていた陰茎も抜けていった。

「んくあ……」

「おうっ……」

絶頂を過ぎて刺激に敏感だった膣内と陰茎には少し強い刺激を送られ、思わず声を出してしまっ

た俺とヒナタ。

陰莖が膣口から抜ければ処女だった膣口もぽっかりと孔を開け、奥から愛液と精液が逆流してきた。

漏れ出た体液はヒナタが草を抜いて剥き出しになった地面へ落ち、卑猥な水の跡を残す。

性欲を満足させた俺はフィールドの効果を操り、今度はヒナタが無意識に自分の股間の惨状を綺麗にするようにさせた。

「よ、よいしょっと……」

再び四つん這いになって草むしりを再開させたヒナタは、先程と同じ様に片手で草を掴みながら、残った方の手でハンカチを取り出して遣り難そ

うに股間を拭いていく。

指が大陰唇を拭けば、愛液と精液に塗れた所為で左右に逃げる。

外側を何とか拭き終わると秘裂の中へ布を挟み、上下に動かして体液を拭っていった。

俺も見ているだけではなく、そそくさと濡れた股間を拭き取ってからズボンを履く。

「ん、しょっと！」

「.....まあ、こんなもんか」

気が付けばヒナタも既にズボンも履いており、片手だった草を筆る手も両手になっていた。

後ろからズボンに包まれる尻を見ていると、股間辺りに薄く染みが出来ているが気にしない事にしておこう。

ふと辺りへ視線を巡らせれば、生え放題だった雑草も残り僅か。

ヒナタを犯している最中に、キバ達が頑張ってくれたらしい。

そろそろ任務も終わりそうなので、最後ぐらいは俺も仕事をしたいと思う。

若干腰が重いけど、比較的時間も掛からずに頼まれていた範囲の草むしりを終えた。

「.....さて、こんなものね」

「先生、これで終わりか？」

「そうね。これで良いと思うわ。後は依頼者に報告して帰るだけよ」

「ああ、やっと終わったぜ」

「……………」

「ふう、今日も頑張ったね」

「腰が痛い。疲れた」

紅の言葉にキバ達は肩を回したり、腰に手を当てて反らせたりと屈んだままの作業で固まっていた身体を解す。

そんなリラックスした状態を微笑みながら見詰めていた紅は、ふと良い事を思い付いた様子で頷いた。

「うん。皆、帰りはちょっと修行をしながら帰ってみない？」

「修行？」

「ええ、そうよ」

聞き返すキバに紅が笑顔で肯定する。

「これから先、万全な状態で任務に行けるとは限らないわ。場合によっては疲れた状態で逃げる事もあるかもしれない」

「まあ、そうだよな」

「そういう緊張した状況に少しでも慣れる為に、疲れた今の状態で里へ逃げ帰るって設定で修行

をしましょう」

「おお！ 良いな、それ！」

つまらない任務から開放された事と、修行と言う響きを聞いたキバのテンションは凄い勢いで上がった。

ヒナタも何気に気合を入れた雰囲気を出しており、紅の案には賛成らしい。

シノは良く分からない。

「でも、先生。具体的に何をやるんだ？」

「設定としては護衛対象を守りながら里まで帰るってのはどうかしら？」



「護衛対象？」

そう言われてヒナタ達の視線は俺へ集まる。

「護衛対象が自分達と同じ位に動けるとは限らないわ。それどころか一般人と言うのが殆ど」

「だから、こいつが丁度良いって事か」

納得した雰囲気を出すキバとヒナタ達。

紅も自分の提案を受けて、やる気を漲らせた後輩達へ優しい笑顔を向けた。

「それじゃ、私は護衛対象を狙う敵の役をするから、そのつもりでね」

「おっ！ 先生が敵役か！ 腕が鳴るぜ！」

「でも、紅先生は上忍だから、私達じゃ太刀打ちできないよ」

「駄目よ、ヒナタ。相手が格下とは限らないわ。ちゃんと格上の相手とも戦うか、逃げる手段をシッカリ考えないと」

不安そうな顔を浮かべたヒナタへ優しい叱咤の聲が飛んだ。

キバも始める前から弱気な姿を見て発破を掛ける。

「そうだぜ、ヒナタ。弱気じゃ真っ先に死ぬぜ」

「うっ、うん。分かった。キバ君」

「任務はどんな物であっても命がけだ。なぜならそれが忍者の仕事だからな」

「シノ君。そうだね。分かった」

「ふふ、やる気を出してくれて嬉しいわ」

「おお！ 本気で来ても良いぜ、先生！」

シノの言葉に後押しされたヒナタは、何とか不安な心を押し込めて勇気を搾り出した。

胸の前で勢い良く拳を打って気合を入れるキバを微笑ましく見た紅は、修行内容を詳しく言う。

「護衛対象は分かってるわね？」

「ああ、こいつを守れば良いんだろ？」

「そう。ある程度は忍者に付いて来れる一般人って設定も追加してね」

「はい！ 分かりました」

「もし、私に護衛対象が捕まっても、取り返すように工夫や努力をきなさい」

「護衛対象は絶対に守る。なぜなら俺達はその程度は出来る実力を持っているから」

「ふふ、頼もしいわね」

一人一人に声を掛け、頼もしい返事に嬉しそうな顔を浮かべた紅。

「それじゃ任務の終了を依頼人に伝えてくるから、その間に出来るだけ里へ移動しておきなさい」

「おお！ 分かったぜ！」

「それじゃ、修行開始よ！」

そして紅の姿は消え、一般人設定の俺を護衛する修行が始まった。

一先ず里へ向かって移動するのだが、ここで異を唱えたのは意外にもシノ。

「里まで真っ直ぐ進んではすぐに捕まる。迂回す

るべきだ。なぜなら相手も最短距離で移動すると知っているから」

「そうだな。森の中を迂回するか」

「うん。そうだね」

シノの言い分も最もだと納得したキバとヒナタは、すぐに提案に乗った。

それからキバは俺を向いて、珍しく真面目な顔で指示を出してくる。

「森の中を移動するから、お前もちゃんと付いて来いよ」

「ああ、出来るだけ精進するよ」

「私達もなるべく脚は合わせるけど、無理そうだったら言ってね」

「ん、分かった」

ヒナタのフォローを受けた後、移動を開始した俺達は森へ入ると里までの最短距離を回避し、作戦通りに少々遠回りをしていく。

忍者らしく枝を飛び移るキバを先頭に、少し遅れてフィールドの反発を使って枝を飛ぶ俺が続き、その後にヒナタが続いた。

シノは横へポジションを取って虫を飛ばし、紅からの襲撃に備える。

しかし、下忍に成り立てのヒヨツ子では上忍の実力には及ぶ筈も無い。

「はい、捕まえた」

「うお！？」

「なっ！？」

「えっ！？」

「……！？」

突然上から落ちてきた紅に首の後ろを捕まえられた俺は、そのまま引き上げられてヒナタ達と引き離された。

あっと言う間の出来事に啞然として動けない三人の姿が遠くなり、森の向こうへ消える。



「ふふ、まだまだねえ」

「紅先生。ちょっと大人気ないんじゃないですか？」

「あら、手加減をしたら修行にはならないでしょう？」

俺が小さく抗議をすると、紅は意地の悪そうな顔でニッコリと笑う。

流石に首の後ろを掴んでの移動は疲れるらしく、俺の身体を持ち上げて肩に担ぐ体勢へ変えた。

自然と里へ進む紅の後ろを見る事になり、周囲の景色が後ろへ凄い勢いで流れていく。

このまま大人しくしているのは不自然だろうから、少しは騒いだ方が良いでしょうか。

「ヒナターー！ た～すけて～！」

「あっ！ こらっ」

騒ぎ始めた事に慌てた紅が立ち止まり、肩へ担いでいた俺を降ろすと俺の頬を両手で挟み、顔を近づけてきた。

明らかに何か幻術でも掛けられそうな感じなので、慌ててフィールドを展開させる。

移動してもフィールドが付いてくるように紅の足の裏を基点として展開されるフィールドは、一瞬の内に俺と紅を巻き込んだ。

「少し口を塞ぐ必要があるわね」

「お、お、おお……」

鼻先が触れる程に顔を近付けて来た紅は、おもむろに俺の頭の位置を下げさせる。

そして胸の位置まで移動させると、服を肩から脱ぎ始めた。

服の上からでは分からなかったが、たふんと出てきた胸はそこそこ巨乳と言える大きさ。

頂点にある乳首の色は薄い茶色で、乳輪は平均よりも少し大きいかもしれない。

白い肌は血管が薄く浮かび上がっており、成熟した大人の色気を醸し出していた。

「里に付くまでの間は、これで口を塞がせて貰うわ」

「んぐっ！？」

「あんっ……」

柔らかな乳首を俺の口へ入れさせた後、何処からか太いロープを取り出して器用に俺の脇の下の胴体と腰をきつくならない程度に縛る。

それからボストンバッグのようにしてロープを肩へ掛け、身体を固定してしまった。

俺の口に乳首を食わさせている所為で、授乳を施していると思われるだろうか。

口を塞がれれば自然と俺は声も出せなくなり、静かになった事に満足そうな顔を浮かべる紅は再び里へ向けて走り出す。

乳首を吸われている方の胸は俺の唇で固定されているが、もう片方は服から曝け出されて固定もされていないので、紅が枝から枝へ跳ぶ度に激しく揺れる。

目の前で巨乳が揺れる光景は俺の興奮を誘い、性欲に従う手が大胆に揺れる巨乳へ重ねられた。

「んっ……？」

「んむっ……」

揺れていた胸に食い込む指へ力を入れれば、硬さは無いがつかたての餅に似た感触がある。

グニグニ揉み解すと指が胸の中へ包まれ、走っているにも拘らずたいして激しくなっていない鼓

動と温かみを感じた。

胸に悪戯する俺を呆れた様子で眉を顰める紅は、軽く注意をしながらも走るのを止めない。

「里まで大人しくそこを吸っていなさい」

「んん〜！」

この反応は間違いなく、幻術を掛けられる前に知識を改ざん出来たらしい。

紅には『口を塞ぐには幻術ではなく、乳首を吸わせればチャクラを消費しないから効率が良い』と誤認させた。

上忍と言えども、流石に世界の外側から来た異能には抵抗出来ないらしく、何の障害も無くフィー

ルドの効果に嵌ってしまう。

俺が口内へ入ってきた乳首を言われた通りに吸ってみれば、紅は肩をピクリと震わせる。

シッカリと乳首を吸われていると認識している分、刺激には敏感な反応を見せた。

乳輪を唇で挟み、吸った所為で柔らかいまま口の中で尖った乳首を甘噛みし、そのまま顎を小さく左右へ動かして歯で乳首を捏ね回す。

「んっ、随分、やんちゃな護衛対象ね」

「ちゆるちゆる……」

「ふあっ……！？」

舌先で唾液を塗るついでに乳首を弾き、滑る刺激を送っていく。

ここまでできれば紅も俺を大人しくさせる為に、フィールドの効果で捻じ曲げられた次の段階へ進む事にした様子。

「あっ、大人しくさせるのは、んっ、何も胸を使うだけじゃ、あうっ、無いのよ？」

「んむっ……」

紅は俺の背中へ手を回して身体を支えると、もう片方の手を俺の股間へ持って行き、ズボンを手早く脱がせて半立ちになっていた陰茎を掴み出した。



「あら、随分、うっ、大きいわね」

「んむー」

乳首からの刺激で漏れる声を挟みながら、年齢の割には大きな陰茎を掌の中で弄ぶ紅。

細く長い指が亀頭の形を確かめるように這い回り、カリへ入ると指先で撫でてくる。

軽く握り締められる刺激を受けた陰茎は、巨乳を揉み、乳首を吸っている興奮と陰茎を握られる刺激で一気に硬さを増していく。

『乳首を吸わせても悪戯をしてくる相手には、精液を搾り出して大人しくさせる』とも思わせている所為で、躊躇い無く陰茎を握ってくる。

「うふふ、厭らしいわね。くふっ、こんなに大きくして.....はっうっ」

「あむあつ」

心成しか淫靡な雰囲気醸し出し始めた紅は舌先で自分の唇を軽く舐め、竿を握った手が上下に動き出して手扱きを始めた。

森の中で移動中に胸を揉み、乳首を吸いながら手扱きされる異常な状態は思ったよりも興奮してしまう。

紅の乳首も固さを持ち始めると一気に吸い易くなり、歯で甘噛みしても硬い弾力が返って来た。

揉んでいる方も付け根から巨乳を掴んでは乳首へ指を動かす、乳輪に差し掛かると強く摘む。

硬くなった乳首は、摘む指を軽く押し返してくる程度までになっていた。

「くあっ……、もう！」

「んむうっ！？」

身体が成熟している紅は性感帯も成長しており、俺が口と手を動かせば紅の頬も赤くなる。

掴んでいる胸もつきたての餅以上に心地良い張りを持ち、揉み応えも増していた。

しかも身体が興奮を蓄えた所為で体温も上がって、乳首に吸い付いて至近距離にある紅の肌から濃くなった体臭が立ち上ってくる。

移動で僅かに搔いた汗の匂いも混じるものの、臭

いどころか逆に興奮を高めてくれるフェロモンすら感じた。

陰茎の硬さは更に増してしまい、紅の手が亀頭を這い回る刺激でビクビクと跳ねる。

「ふふ、んっ、随分苦しそうねえ？」

「んっ！ んんっ！！」

張ったカ리를指先で撫でつつ、カウパー液が出てきた鈴口へ指を触れさせると体液が糸を引きながら亀頭に広がった。

少し冷たく女らしい細い指が亀頭を動く感触は俺へ快感を送ってくる。

乳首を吸いながら陰茎の快感に目を細めてしま

う俺を見た紅は、満足そうな顔を浮かべた。

「ふうっ、暫くは、あっ、静かになりそうね」

「んむっ……」

太い血管がいくつも走る陰茎を、僅かに力を込めた手で扱き続ける紅。

手を動かすと亀頭から伸ばされたカウパー液が全体に広がって、動かしやすくなった事で手は更に激しさを増す。

風を切って走っているなので、竿の手が触れられていない部分に流れる風が当たって冷たい空気を受けた。

陰茎の熱い体温が移った紅の手も熱を持ち、それ

に比例するかのように扱く動きも熱が入る。

限界まで張ったカリの凹みを重点的に弄り回される快感は大きく、射精の欲求が突き上がってきた。

思わず乳首を噛んでしまい、揉んでいる方の胸も強く掴む。

「んあっ、ちょっと、強過ぎるわよ。もう……」

「ずず……」

長く乳首を吸っている所為で漏れ出そうになった唾液をすすれば、先程よりも卑猥な音が紅の胸の中へ響いた。

俺の激しい吸い付きを受けた紅も、意趣返しにと

陰茎を扱く手へ力を入れて激しく上下に動かす。

「んむっ！？」

「悪い子には、ふっ、お仕置きしないと、うっ、いけないわね！」

快感を含む言葉と共に、竿を扱っていた手は陰茎の上へ移動して鈴口からカリまで包み込み、そのまま左右へ回して亀頭だけを刺激してくる。

尿道を駆け上がろうとしている精液を我慢している最中に強い刺激を受けてしまえば、巨乳の肌一色に染まっていた俺は視界を白く染めて絶頂へ達してしまった。

「んぐくっ！！？」

「うふふ、元気に出してるわね。んぐくっ……」

掌の中で精液を吐き出しながら上下に暴れる陰茎を押さえながら、してやったりと笑う紅。

溜まる所がないので指の隙間から漏れた精液は、通り過ぎる木々の間へ落ちていった。

亀頭の上から押さえられても射精の勢いは全く収まらず、紅の掌の中へ熱い体液を吐き出し続けた。

徐々に精液が収まっていくと紅は亀頭をゆっくり撫で回し、鈴口に残った精液を掬い取りつつ手を離す。

そして顔の前へ持って行き、手を開いて掴み取った体液の量に僅かな驚きを見せる。



「うわ、随分出したわね.....」

「ん.....」

「.....凄く濃い匂いがするわ」

手を汚す精液を指先で弄び、匂いを嗅いで頬を赤く染めた。

目も欲情を溜めているようにも見えるが、手扱き以上の行動は起こさない。

前提条件として俺を大人しくさせる為と誤認させている所為で、自分の欲情を出すのは上忍としてのプライドが許さないのだろう。

自分の顔へ近付ける手が徐々に口元へ接近し、舌

で舐め取ろうとした所で紅は里の近くにまで来た事を認識する。

「.....あら、残念」

残念と思ったのは精液を舐められなかった事か、それともヒナタ達が俺を奪還出来なかった事か。

ともかく目的地に着いたので樹の枝から降り、草むらへ降り立つ紅。

「さて、そろそろ、時間切れね」

「んむあ」

「もう口を離しても良いわよ」

「ふはっ……」

紅の胸から口を離すと、目の前には今まで口内になった乳首が現れる。

吸われていた事で乳輪から赤くなり、尖った乳首は唾液で光っていた。

揉んでいた方の胸からも手を離すと、赤く手形が残っている。

乳首と胸に張り付いていた手と口が離れたのを確認した紅は、俺を縛っていたロープを外して拘束を解いてくれた。

自由になった俺は地面へ降り立ち、丸出しだった陰茎をズボンの中へ仕舞う。

それから紅が着崩れていた服を直したのをみて

から、展開していたフィールドを消した。

「ちょっと出し過ぎよね」

「先生のテクニックが良かったもので……」

若干呆れた様子で精液に塗れる手を拭っていく紅は、ジト目で俺を見てくる。

しかし口元は笑っているのだから、からかっているだけらしい。

フィールドを消しても誤認させた知識は元には戻らず、自分が授乳まがいに乳首を吸わせ、手扱きをして精液すら搾り取ったのを一切変だと思っていない様子だった。

精液に塗れた手を綺麗にしてから暫く経ち、やっ

と後ろからヒナタ達がやってくる音が聞こえてくる。

「.....やっとな追いついたわね」

「はあはあ——」

「はあふう——」

「.....」

呆れを隠さない紅は、到着した途端に息を切らして座り込んだヒナタ達を見下ろす。

シノだけは息を吐く音を出さず、肩だけが激しく上下に動いて疲労を見せる。

「ちょっと、遅過ぎるんじゃないかしら？」

「はあ、はあ、せ、先生が、はあ、はあ、早すぎるんだよ。はあ、はあ——」

「んくっ、ふう、はあ、そ、そうです」

「.....」

「ふう.....。じゃあ、明日からちょっと厳しい修行をしないとイケないわね」

修行を始める前の威勢の良かった姿は跡形も無く、仰向けなったり座り込んだりとそれぞれが疲労困憊であると全身で表していた。

俺だけは運ばれたただけなのでピンピンしているが、それでも手扱きをされた所為で腰に軽い疲労が溜まっている。

一時的に班に入れられたとは言っても俺は部外者なので、特に何も言う事無く座り込んでいるヒナタ達を見詰めた。

「はあはあ……、んっ、ふうはあ……」

「ん？」

「っ！？　ふう……はあ……」

荒い呼吸を繰り返し、身体に溜まった疲れを癒しているヒナタがチラチラと俺を見てくる。

視線が合えば激しい運動で赤くなった頬を更に赤く染め、パッと顔を反らした。

あからさまに恥ずかしがる反応を不思議に思っ

た瞬間、俺は原因を思いつく。

ヒナタは日向一族の血継限界である白眼を使える。

チャクラを見る事で戦う相手の動きを読み、物陰に隠れている敵や遠くに居る目標まで見通す事が出来る力。

当然、逃げる紅を補足し続ける為には白眼を使うだろう。

視界から消えてもチャクラを追う事で目標を見続けるのなら、紅が俺にした事もシッカリと見た筈。

草むしりの最中に犯されても、ヒナタ自身は未だに処女と思い込んで初心な心を維持したまま。

俺の陰茎で初めて男の股間を見た上、知識として知っていた紅の卑猥な行為で俺と紅の顔をまともに見れないのか。



風の音が聞こえる中で荒く繰り返されていたヒナタ達の呼吸も落ち着きを取り戻していくと、紅は改めて声を掛けた。

「そろそろ、落ち着いたかしら？」

「ふう……何とか大丈夫だぜ」

「はい」

「……………」

夕焼けが差し込む里を見下ろす位置にある丘から、何処か懐かしい景色が広がる中、座っていたヒナタ達も立ち上がり、紅の前へ並ぶ。

「さて、今日の任務は終わりだけど、明日からの修行は厳しく行くわよ」

「おお！」

「はい！」

「.....」

気合を入れて返事を返すキバと、未だに羞恥心で頬を赤く染めながらも強く頷くヒナタ。

シノは相変わらず無言であるものの、雰囲気はやる気が満ちていた。

俺はどうせ今日だけの班員なので、あくまでお客さんの扱いだから紅の視線は向けられない。

「それじゃ解散して良いわよ」

「ああ、今日もやっと終わったぜ」

「ふう、ちょっと脚が……」

「……………」

それぞれが帰路に付く中、俺は紅に声を掛けられる。

「貴方の方は、火影様には私から報告も入れておくから」

「あっ、そうですか。お願いします」

「ええ、また機会があれば任務をする事もあるで

しょうけど、その時はもう少し実力を上げておいて」

「まあ、頑張りますよ」

「それじゃ、貴方も解散して良いわよ」

「はい、んじゃ、さようなら」

「ええ、気をつけてね」

「失礼します」

火影に報告と言うのは、俺みたいに各班を点々とする忍者は今まで居なかったもので、実際の任務にどのような影響があるかを報告するのだ。

班員達の絆を深める途中で他の人間が入ってもチームワークを乱さず、任務を遂行する為の訓練も兼ねている。

その結果を、担当上忍は俺の責任者である火影に知らせる流れになっていた。

「.....あっ」

大人しく帰宅途中だったが、ヒナタのフォローをしていないのを思い出す。

紅の様に誤認させていない状態で手扱きを見た所為で、普通の反応を返して顔を赤くしていた。

引っ込み思案で恥ずかしい行為を見たとき、人に言うとは思えないものの、少しは意識を操っていた方が良かったかもしれない。

またヒナタを犯したくなった時に、俺を見た途端に紅との行為を思い出して避けられては犯すに

犯せなくなる。

しかし逃げる前に声を掛ければヒナタの性格からして、ちゃんと話ぐらいは聞くだろうか。

もし逃げても、フィールドを使って動きを止めれば良いかもしれない。

「.....まあ、良いか。今日は疲れたし帰ろう」

腰の疲労も溜まっている事であるし、一度『終わった』と気が抜けた心では改めてヒナタを追う気力も無くなっている。

夕日の眩しさに目を細めながら、俺は次の任務を果たす為に英気を養う必要があるのだ。

今日の所はサッサと帰って寝るに限る。

## その2

火影から渡された紙に書かれている予定に従って、待機場所へ向かうと暑苦しいタイツが目に入った。

「うげっ……」

「おっ！ 良く来たな！！」

俺の姿を確認した途端に、暑苦しいウィンクをし

ながらサムズアップしてくる<マイト・ガイ>

太い眉毛におかっぱ頭の無駄に暑苦しい上忍で、自称<はたけ カカシ>の永遠のライバル。

ガイの声につられて勢い良く振り返った<ロック・リー>は、何やら俺を珍しそうな顔で見えてきた。

ガイと同じく緑のタイツに身を包み、何よりも特徴的なのはガイと同じ太い眉毛とおかっぱの髪型。

変に目がキラキラとしていて、一度見れば忘れなさそうな顔だ。

その隣の、ガイに吊られて俺へ振り返るのは<テンテン>

袖の無いピンク色の中華服っぽい上着を着て、下は七分丈のズボンを履いて腰に大きな口寄せ用の巻物を付けていた。



頭の上で茶色の髪を二つのお団子に纏めた髪型をしており、眉を顰めた顔は如何にも迷惑そうな気持ちを全面に出す。

しかしそれを上回る不機嫌さを醸し出しているのは<日向 ネジ>

昨日犯したヒナタの親戚、と言うか分家であり、今はまだヒナタの事を心底憎んでいる時期だ。

テンテン以上に眉間へ皺を寄せ、俺に対して敵意すら見せてきていた。

「遅れましたか？」

「いや、我々も今来た所だ！ 気にするな！」

「そうですか」

ガイの近くに着地すると、俺の肩を叩いて歓迎を示してくれる。

力が強いので痛いばかりだが、見世物の様にテンテン達の視線を集めている状態では大げさな歓迎が在り難くも感じた。

「今日はその人と一緒に任務に行くのですか？  
ガイ先生」

「うむ！ そうだ。リーよ！」

「ふん、足手纏いを押し付けられるとはな」

「まあ、先生の言う事も最もだしね。良いんじゃない？ 今日ぐらいは」

「ふん……」

何を言ったのか気にはなるが、どうせガイの事だからバカ正直に俺が体術も忍術も成績が悪く、知識だけが取り得の下忍だと言ったのだろう。

あからさまに俺へ侮蔑の視線を送るエリート思考のネジの表情が物語っている。

テンテンは気が立っているネジを落ち着かせようとしているものの、足手纏いの俺を班に入れるのは反対している雰囲気があった。

リーだけがガイの言葉を好意的に受け取り、叩き込まれたハングリー精神で何もしていないのに燃えている。

「それでガイ先生。今日の任務は何ですか！？」

「うむ、今日の任務は……」

「きよ、今日の任務は……？」

リーの疑問に、もったいぶった間を開けて厳しい視線を向けるガイ。

豪快に笑っていたにも拘らず、真面目な顔を浮かべて睨みつけてくる姿に、リーは冷や汗を掻いて緊張で唾液を飲み込む。

そして、ガイは遂に短い答えと共に口を開いた。

「無い！！！」

「はっ！？」

「えっ？」

「何だと……？」

ガイはニカッと笑いを浮かべたと思えば、任務は無いと言い放つ。

先程まで緊張を滲ませていたテンテン達はポカンと口を開けて啞然とするも、すぐに言われた事を理解した。

「ガ、ガイ先生！ 無いってどういう事ですか！」

「うむ、本当なら永遠のライバルであるカカシと同じCランクの護衛任務をしたかったのだが無かったのだ！」

「べ、別に護衛任務じゃなくても、Cランクの任

務ならあるんじゃないですか？」

「駄目だ。ライバルであるカカシが護衛任務をするなら、俺達も護衛任務かそれ以上の任務をしなければならない」

自称カカシの永遠のライバルを言うガイは、変なこだわりを持っているらしい。

確かにライバルと認識している相手が、先に難易度の高い任務に付いたら自分もと言うのは良い。

だが、それで受け持つ部下を無視してしまえば話は別だ。

「しか～し！ 心配する事は無い！ こんな時の為に修行を考えていたのだ！」

「さ、流石です！ ガイ先生」

「修行って、いつもやってるのじゃないんですか？」

「甘いなあ、テンテンは！」

「あ、甘いって……」

目の前で人差し指を振りながら呆れた様に頭を左右に振るガイ。

「Cランク相当の修行はいつもとは違うぞ！  
何故なら今回は全員が敵同士だからな！」

「ぜ、全員がですか！？」

「ほう？」

「そして、範囲はこの広場の中だ。少しでも出てしまえば、そいつは失格！」

『ズビシッ！』と効果音が聞こえそうな動きで修行内容を発表されると、今まで不機嫌を隠さなかったネジが始めて興味深そうに顔を見せた。

リーは相変わらず熱く反応をしているものの、戸惑いの方が大きいらしい。

テンテンは内容よりも高いテンションにげんなりしている。

「そして、俺以外で最後まで残っていた者が勝者だ！」

「うおお！！ やる気が出てきました！ ガイ



先生！」

「そうだろう！ リーよ！」

「はい！！」

「えっ、でも、ガイ先生が私達と戦うなら誰も残れないんじゃないですか？」

「心配するなテンテン。手加減はしてやるぞ！」

「駄目ですよ！ ガイ先生！ 本気でなくては修行になりません！」

流石に上忍であるガイ相手では、下忍に成ったばかりの自分達が敵う訳がないと言うテンテン。

ガイも下忍に本気を出そうとは思っていなかったらしいが、無意味に熱血を帯びているリーに煽られてガイの目に本気の色が宿る。

更にネジも不敵な笑みを浮かべたままに組んでいた腕を解き、雰囲気は戦闘態勢へ変わってきた。

「ふん、そうだな。リーの言うとおりの。俺達の下忍であっても修行であるなら本気を出すべきだ」

「おっ！ ネジまでそう言うのなら仕方が無い！ 本気を出そう！」

「ちょっ！」

その答えに慌てたのはテンテン。

咄嗟にガイを止めようと手を伸ばすが、無常にも戦闘を開始する合図の方が先だった。

「では、修行始め」

「むっ！ 白眼！！」

「行きます。ガイ先生！」

「来い。リーよ！」

「ああ、もう！！」

「えっ、マジでやるの？」

合図と共にガイへ駆け出したのはリーとネジ。

得意の柔拳で接近戦を仕掛けるネジは早速白眼を発動させ、リーもネジの攻撃の合間を縫ってガイへ向かう。

上忍の立場は伊達ではないのか、ガイは二人の攻撃を難なくさばき、積極的にやり返している。

テンテンは遅れて腰に掛けていた大きな巻物を一気に開くと、口寄せの術で忍具を取り出した。

「仕方ないでしょ。ガイ先生が言ったんだから！」

出てきた忍具はクナイを始めとした多種多様の道具たち。

それを掴むとテンテンはガイではなく、俺へ忍具を放ってきた。

「はっ！！」

「うわっと！」

どうやらネジとリーはガイへ、テンテンは俺を相手にして戦うらしい。

しかし俺は体術が駄目なので、普通に戦ってはすぐに終わってしまう。

テンテンの最初の攻撃は口寄せをしてからだったから何とか避けられたものの、次の攻撃は間違いなく避けられないだろう。

なので、即座に広場を覆う程度のフィールドを展開した。

「やっ！」

「うおっ！」

「この！！」

最初にしたのはテンテンに『俺へ攻撃する時は手加減する』と言う意識の誘導だ。

その甲斐あって飛んでくる忍具を何とか回避できる。

「ちょこまかと！」

「うわっ！」

「そこっ！」

「ぐはっ！」

意識の誘導をしても、そもそも俺は勝つ気が無いので絶対に攻撃を当てられないようにはしていない。

精々テンテンが本気ではない状態であれば手加減をしてしまう程度であり、避けられ続けて苛々が溜まってしまえば誘導は切れてしまう。

流石に急所は狙ってこないテンテンでも確実に俺の機動力を奪い、暫くしないでアッサリと討ち取られた。

「たあっ！！」

「ぐわっ！」

「よっし！」

思ったよりボロボロになってしまった俺は倒れ、討ち取ったのを喜ぶテンテン。

勝った事で緩んだ気を引き締めなおしたテンテンは即座に目標をネジとリーが戦っているガイへ変えるも、振り返った先には激しい攻防が続いていた。

「.....付け入る隙が無いわ」

土煙を上げながらネジが掌底を放ち、ガイが交わしながら反撃を繰り返す。

その攻撃の隙を縫うようにリーが蹴りを入れ、ガイは防御をすると同時にリーの脚を掴んで投げた。



「甘いぞ！」

「わっ！」

「邪魔だ。リー！」

「ぐはっ！？」

リーが飛んだ方向にはネジが居り、全員が敵である設定なので非情にも撃墜される。

それでも反骨精神が萎えないリーは地面に手を付くと、瞬時に伸ばして逆立ちをしながらネジの顎を狙って蹴り上げた。

「やっ！」

「ふっ！」

「良いぞ。その調子だ！」

一連の動作が残像すら残し、頻繁にネジとリーが入れ替わる状態にテンテンは持っている忍具を放つに放てない。

全員が敵同士なので後ろから狙えば良いと思うも、万が一倒してしまえばあの中に自分が入る事を想像したテンテン。

曲がりなりにも修行と銘打っているのだから、本当なら参加しなければいけないが力無く頭を横へ振って諦めた。

「.....無理」

そして落ちた忍具を拾いつつ、倒れる俺へ近寄ってくる。

「大丈夫？」

「ああ、たいした怪我もしてないしな」

「Cランク相当の修行でたいした怪我をしないで、どれだけ手加減したんだろう.....」

「んじゃ、あっちに加わるか？」

「止めとく」

フィールドの効果で俺を倒して満足したテンテンは、スッカリ休憩する気満々だった。

戦闘を続ける雰囲気が無くなり、回収した忍具を巻物へ仕舞ってから俺の隣へ座ってくる。

「隣、良いわよね？」

「良いぞ。誰の物でもないし」

「あっそ」

原作では余り出番は無く、あっても特に活躍する事無く退場してしまうキャラだったが、改めて間近で見る横顔は間違いなく美少女。

風上に座ったテンテンから美少女らしい良い匂いが俺へ漂ってくると、朝起きてから燻っていた

性欲を刺激して止まない。

「しかし、本当に元気よね～」

「テンテンも大変だよな。あんなのに囲まれて」

「……………はあ」

「落ち込むなよ」

「もっと普通の人の方が良かった……」

担当上忍が濃く、仲間の一人がその弟子であり、同じく濃い上に高いテンションも受け継ぐ。

もう一人は協調性が無くても高いプライドがあって、分家と言えども地位が高い事には変わりないエリート。

そんな中で振り回される一人普通のテンテンは、流石に疲れるのだろう。

溜息を付いたテンテンを慰めつつ、俺は俺で目的を果たす為にフィールドを操った。

「まあまあ、そんなに落ち込むなよ」

「ああ、いっそ私もあんたみたいに色々な班を回るポジションが良かったわ」

「それは無理だろうなあ」

「なんでよ？」

予想通りに食いついてきたテンテンへ、これからする事に対して『修行なら仕方がない』と思わせ

る。

当然ながら広場全てを覆っているフィールドは、遠くで戦っているガイ達にも影響を及ぼした。

「テンテンは忍具を武器として使ってるけど、自分に備わっている武器を全く使っていないからな」

「自分に備わってる武器ってなによ？ リーやネジみみたいに肉弾戦って事？」

「違うよ」

「じゃあ、何なのよ？」

「それはな、女の武器だ」

「.....はあ？」

目を合わせて真面目な顔で言うとテンテンは呆れた表情で聞き返し、しかも小首を傾げて若干バカにした空気すらあった。

「何？ 色気が足りないって事」

「戦うばかりが忍者ではないだろう？ 時には敵の目を欺いたりする必要もあるだろ」

「それは.....そうだけど」

忍者の仕事は敵を始末する事だけではない。

下忍が草むしりをさせられるように、この世界では何でも屋的な一面も持っている。

外貨を稼ぐ為には戦闘に限らず、お守りや情報収



集、破壊工作など色々な仕事をする必要もあるのだ。

「そこで役立つのが女としての色気だよ」

「でもさ、それって薬とか使えば良いんじゃないの？」

「テンテンは薬には詳しくないだろう」

「うっ、そうだった……」

テンテンは原作において珍しい漫画補正のないキャラクターだ。

リーみたいに気合で何とかするとか、ネジみたいに血継限界を都合良く持つ設定ではない。

どちらかと言えば、俺が前に居た現実の忍者と最も近い戦い方をする方だ。

口寄せその物が非現実的であるものの、忍術に頼らず忍具のみで戦うのは、チャクラと言う特殊な力が無くても出来そうな感じでもある。

「で、でも、私にだって色気ぐらいはあるわよ」

「どんな感じで？」

「.....あ、あっは〜ん」

照れを前面に押し出ししながら、身体をくねらせて精一杯の誘惑をしてくるテンテン。

上げた片腕は自分の側頭部へ触れて髪を撫で、もう片方は腰へ手を当てて俺へウィンクを送って

きた。

しかし、色気はビククリする程一切、全く、これっぽっちも無い。

「……………」

「やめて、そんな目で私を見ないで！」

俺が憐れみの視線を送れば、テンテンは顔を覆って背中を向けた。

「まあ、俺が協力するから、色気を出す修行をしてやろうか？」

「えっ？ どうすれば色気が出るのか知ってる

の？」

「ガイ先生から聞いていないか？ 俺は体術も忍術も出来ないけど知識だけは優秀だって」

「ああ……確かそんな事言ってたわね」

「だから、俺の言う事を聞けば色気を出すのは簡単だよ」

「……変な事するんじゃないでしょうね？」

「大丈夫だって。ネジやリーの後ろを守る為にも『実力を上げる為に修行中の事は何があっても受け入れないと』」

「……………そうね」

事前にテンテンヘフィールドの二つ効果を受け入れさせる事で、意識に刻まれる暗示の効果を増

加させる。

場の空気で暗黙の了解を匂わせるのではなく、完全にテンテンの意思を通して承諾させる事が『何をされても受け入れる』効果を上げるのだ。

『修行だから仕方が無い』と思わせておけば俺がフィールドを張っている限り、テンテン本人は勿論、未だに激しい戦いをしているガイ達にも怪しまれないだろう。

「それじゃ、ちょっと身体を触るぞ？」

「えっ……うん。良い……けど、本当に修行なのよね？」

「そうだよ。修行だよ」

掲げた免罪符を受け入れても、心の根底にある羞恥心は根強いみたいだ。

それでも俺はフィールドの効果を利用して説得を続ける。

「まあ、在り来たりな修行なんだけどな」

「そ、そうなの？ 初めて聞いたけど」

「秘匿された技術は誰にも知られないものだろう？」

「そう、ね。分かったわ」

最後の一押しをすると、テンテンは漸く抵抗を消した。

燻っていた羞恥心も低くなったらしく、俺と肩を触れる程に近付いても身体を引かない。

「それじゃ、修行をするからな」

「ええ、お願い」

改めて言質を取ってからテンテンの背中から手を回し、俺から見て向こう側にある胸を掴み、同時に近い方の胸も掴んで感触を楽しむ。

「うっ!？」

「多少恥ずかしくても我慢しろよ？」

「わ、分かってるわよ」

両方の胸を揉まれるテンテンは顔を赤くしつつも、視線を下ろして自分の身体を触る俺の手を見ていた。

自分の身体で男がどれだけ興奮するのかを的確に理解しなければ、女の武器を使うとしても効果が薄いと認識しているのかもしれない。

これは普通の武器でも同じで、効率良く使用するには効果と威力を知っておかなければ駄目だと理解しているからだろうか。

日頃、忍具で戦うテンテンにとって、新しい武器を観察するのはごく普通の事の筈。

その観察する視線の先では、俺の手で形を変えられる自分の胸。

大きさは掌の中にすっぽりと包み込める程度で、



揉むには丁度良い。

指を動かしても厚い生地 of 服の向こうには確かな柔らかさがあり、揉み解せば俺に興奮をもたらしてくれる。

服の下にはブラの感触があり、俺が指を動かすと徐々にずれていった。

「.....うっ、ちょっと待った。し、下着が.....！」

今テンテンが着ている服は生地が厚い上に、若干ゴワゴワしている。

ブラがずれてしまえば当然ながら胸は直接生地に擦れ、一番の被害を受けるのは乳首だ。

揉まれる刺激には余り反応を返さなくても、流石

に乳首を荒い生地で擦られると意識しなくても反応を返してしまう。

しかも曲がりなりにも性感帯なので、送られてくる刺激が緩やかな快感となってテンテンの身体を流れた。

「テンテンも見てるだけじゃなくて、自分で触ってみろよ」

「えっ、や、毎日お風呂で触ってるけど……」

「そうじゃなくて、もっとここをだな……」

身体を洗う程度では俺の求める『触った』とは程遠いし、おそらくテンテンは胸を触れと取ったのだろうが違う。

それを分からせる為に胸を揉んでいた手をおもむろに下げ、ショートパンツの上から股間へ手を被せた。

「きゃあ！？」

行き成り女として大事な箇所を触られたテンテンは、咄嗟に俺の手を掴んで自分の股間から引き離す。

しかし、それで引く俺ではない。

顔を真っ赤にして非難の声を出す前に、修行と言う免罪符を再びかざす。

「こ、この変——」

「修行だろ？」

「——た、あ……ああ、そ、そうだったわね。うん、何もおかしくない……よね？」

「ああ、おかしくないぞ？ 武器を扱うために必要な修行だよ」

「うん。そうよね」

免罪符を聞いてポカンと口を開けた後、恐る恐る改めて確認してきたテンテンへ自信満々の顔で答えてやれば、自分を納得させるように頷いて掴んでいた俺の手を離した。

拘束された手が自由になったので、再びズボンの下に隠されているテンテンの股間へ掌を被せる。

今度は分かり易い拒否をしないで無抵抗のまま、

テンテンは自分の股間は触る俺の手を見ていた。

顔を真っ赤にしながらも、女の武器を詳しく知る為に見詰め続ける。

俺の手は厚い生地を使っているズボンの上からでも、大陰唇を押して秘裂にさえ指を食い込ませた。

そのまま指を上下に動かしつつ、胸では乳首を摘む。

「はうっ！？」

布の上からであっても、性感帯を弄られるテンテンは快感を含んだ声を漏らした。

俺が指を動かして乳首と、確認出来ない淫核辺り

を刺激する度にピクピクと身体を小さく震わせる。

「テンテン、シッカリと見ておけよ？」

「わ、分かってる、んっ、わよ！」

羞恥に染まるテンテンの表情に、僅かではあるが確実に欲情の雰囲気が滲んできた。

男の手に蹂躪される自分の身体を見下ろす目は濡れ、唇が少し開いて甘い吐息を吐き出す。

普通ならどれだけ恥ずかしい状況であっても、修行であるとの免罪符は強さを求める忍者にとって何よりも重いものだ。

その忍者としての性質とも言える気持ちを利用

し、俺の手はテンテンを弄り回していく。

「服の上からじゃ、あんまり効果的じゃないから脱がすぞ」

「えっ！？ ……うん、分かったわ」

承諾を貰った俺はまず、中華服っぽいテンテンの上着を脱がしていく。

前を留めているボタンを外してから、ファスナーを降ろす。

上着が上半身を開放していくにつれて、白い鎖骨から胸元が見えてきた。

服の上からでは分からなかったが胸の谷間が作られ、その谷間を作るブラは白く簡素なもの。

しかも俺が弄った所為で乳首がカップから食み出しており、心成しか赤くなって尖った形をブラの端から覗かせている。

自分の視線の下で自分の胸が開放されていく様子を見詰めるテンテンの顔にも、羞恥心が大きくなり始めた。

赤かった頬は更に赤みを増して、甘い吐息を漏らしていた口はグッと閉じられる。

俺はテンテンの羞恥心を煽ろうと思い、態々見えるようにしてカップから食み出る乳首を指の腹で押した。

「んっ!？」



そして軽く指を回して尖った乳首が形を変える様子を見せる。

僅かな力しか入れていないので、テンテンにくすぐられる様な快感をもたらしているだろう。

既に快感を含む吐息を漏らしているテンテンは、大きく口を開いて嬌声を吐き出したい欲求に駆られている筈。

修行と納得しても羞恥を感じて溜め込むが、これが逆に身体を駆け巡る快感を高める結果となった。

「.....テンテン、別に気持ち良かったら声を出しても良いんだぞ？」

「っ.....、そ、ふぁっ、それじゃ、修行に、んっ、ならないでしょう！ あっ！」

「いや、自分が受ける快感をどう受け流すかも修行だから、気持ち良かったら我慢しないで出さない」と

「そ、そう……！ んっ！」

一応、声を出しても良い免罪符を打って見せたものの、声は未だに出てこない。

仕方ないので、もう少し押してみる。

「今、自分の胸がどうなっているかと言ってみれば、少しは自分の身体に対して詳しくなるんじゃないか？」

「ふっ、あっ、ち、乳首……が！ 捏ねられて、るわ！」

「そうそう。シッカリ現状を言葉にして確認するんだぞ？」

「あっ、分かった、わ……！ んふっ！」

実況させる事で硬く閉じられていた口を開かせ、言葉の端々に混じる嬌声を引き出す。

乳首を摘んでいた手をテンテンの背中へ回し、ブラのホックを外せば、白く透き通る胸が完全に露出した。

ブラから開放される反動は丁度良い大きさの胸をぷるんと揺らし、テンテンの羞恥心を煽る。

「ああ、胸が……！」

テンテンの上着を前だけ開け、曝け出された胸を指で軽く触る程度の力を入れて肌を撫でる。

殆ど感じない産毛だけを指の腹で刺激しつつ、下乳を触ってから乳輪へと向かわせる。

摘んでいた時よりも刺激は微小であり、それこそ肌を撫でる程度の刺激を受けた胸は鳥肌を立てた。

尖っていた乳首も性的な刺激と合わさって、乳輪から盛り上がる厭らしさを見せる。

「胸の肌を撫でられて、んっ、乳首が、ああ、立ってる……！」

顔を真下へ向けて自分の胸を見続けるテンテン

の表情も、欲情を強くさせてきた様子。

厭らしく立った乳首を客観的に認識した所為で、身体から受ける快感だけではなく、視覚でも性的な興奮をかき立てられたみたいだ。

尖った乳首を摘んでみれば指に反発を感じる硬さを返し、捻るようにクリクリと刺激していくと、テンテンの口から甘い声が漏れた。

「んあっ、ふっ、あぁうっ！ 乳首、気持ち良い……！」

乳首を摘んでいる親指と人差し指以外は胸全体を下から包み、動きに差をつけて揉んでいく。

性的に目覚めたお陰で、刺激を快感と受け取るようになったテンテンの身体は小さく跳ねた。

ズボンの上から淫核辺りを弄っていた指先も一旦股間から離し、今度はウェストのボタンを外してからテンテンへ声を掛ける。

「テンテン、ちょっと腰を上げてくれないか？」

「っ！？ ああ、そこは、だ——」

「修行だろ？」

「——うっ！？ え、ええ。分かったわ」

「俺がズボンを引くから、タイミングを合わせて上げてくれ」

「ほ、本当に外で……？ んっ！」

「ああ、修行は外で行わないと危険だからな」

未だに拒否の言葉を漏らすテンテンを適当に言い包め、ボタンを外して余裕が出来たズボンのウェストを掴んだ。

そして合図を出してタイミングを合わせさせて、一気に引き降ろす。

「せっ！」

「んっ！！」

思わず乳首を摘んでいる指にも力を入れてしまったが、テンテンはちゃんとタイミングを合わせて腰を上げてくれた。

膝下までズボンが降ろされると、股間を守る白い

ショーツが出てくる。

所々に付いているフリルは、年頃の女の子らしい可愛さを感じさせる上着と同じ薄いピンク。

全体的に落ち着いた感じがあるものの、ショーツのクロッチ部分を持ち上げる大陰唇の中心には愛液の染みが大きき広がり、若干中を透けさせていた。

当然ながら顔を下に向けているテンテンもそれを見てしまい、胸を曝け出された以上に顔を赤くさせる。

「ああ……！　こ、股間が、透けてる……んあつ！　ふあつ！！」

弄られ続ける乳首からの快感で嬌声を出しながら



ら、股間の現状を報告するテンテン。

俺自身も興奮が高まるのを感じ、そっと濡れる大陰唇へ指を接触させた。

「あうっ！ 触られ、た。はっ！ ああっ！！」

ショーツに染み込みきれなかった愛液が、指を軽く押し付けただけで滲み出してくる。

指先は簡単に大陰唇へ食い込み、秘裂の中へ入ってしまった。

熱くなった女性器の熱さは、ズボンの上から触るよりもハッキリと感じる。

緩く指を上下に動かしてもショーツの布の感触を受ける前に愛液で滑り、大陰唇が柔らかく指先

を包む。

濡れたショーツでは秘裂の端でポツンと存在を主張していた淫核さえも見えてしまい、テンテンの身体が完全に性感の虜になっているのが分かった。

「直接接触るぞ？」

興奮で思考が鈍ってきた俺は答えを待たずに、クロッチを捲ってショーツの中へ指を差し込んだ。

「ふぁっ！？ 大事な所が、さ、わられて——、指が入って、ええ！！」

ニチャツと音が聞こえそうに感触が俺の指先を向かえるも、ヌルヌルで動かし易過ぎる所為で勢い余った指は秘裂の中へ行き成り入ってしまった。

僅かと言えどもスピードが付いた手は更に奥へ行ってしまう、指先は膣口へ進入する。

その瞬間にテンテンは腰を大きく跳ねさせ、下を向いていた頭も勢い良く空を見上げると、乳首を摘んでいた掌の中でも胸が弾んだ。

「おお！ 暖かいし、締まる……！」

「ひあっ！ 中で、う、動いてる！」

感動の余りに膣口付近で指を動かしてみると、テ

ンテンの腰は小さくも激しく上下に動いた。

地面から上がった尻は振るえ、軽いブリッジをしている体勢になってしまう。

快感を溜め込んだ身体には膣口からの刺激は強く、羞恥心に塗れながら修行をしているつもりだったテンテンの思考が一気に白く染まった。

食い込む指を暖かく包んでいた秘裂からは潮すら小さく噴き出し、宙に浮く腰がガクガクと痙攣を繰り返す。

浮いた腰に引き摺られて上半身も上がり、震える肘で地面を押して両手足だけで身体を浮かせる。

「いっ、ひうっ！？ な、何か来る！ ううっ！！」

俺は胸を揉んでいた方の手でテンテンの背中を支えながら、膣口に入れたのとは別の指で、秘裂から顔を出した淫核を強めに摘んで捏ね回した。

「ひっ！？ あっ、駄目！ いきう！？ んんー  
ー！！」

そして、テンテンは俺の指から受ける刺激で絶頂に達する。

小さく嘔き出していた潮は盛大にショーツを濡らし、膝の辺りに引っ掛かっていたズボンまで飛んだ愛液が股間部分を濡らす。

上下に痙攣する腰は引き締まった尻さえ揺らし、上半身は空中で仰向けになった胴体の上で綺麗な胸が揺れていた。

空を見上げていた目は、身体を駆け巡る絶頂の快感に耐えるようにギュッと閉じられる。

「んっ！！ んうっ！！」

膣口に差し入れた俺の指は強く締め付けられ、指先に感じる膣壁すら激しく蠢いていた。

暫く痙攣するテンテンの身体を支えていると、ゆっくりと地面へ沈み込む。

「ふう……！ はあ……！ ああ……」

朦朧とした視線で宙を仰ぎ、荒い呼吸を繰り返す口からは満足気な吐息が混じっていた。

上下に動く胴体でも、若干胸が横へ開いてプリンを思わせる動きで俺の目を楽しませる。

地面へ落ちた股間では噴き出していた愛液の量を減らし、潮も収まった。

絶頂の余韻に浸るテンテンの顔は頬を赤く染め、滲んだ汗が解れた髪を張り付かせる。

目の前で激しい絶頂を見せられた俺の我慢も既に限界であるのでズボンを脱ぎ捨てると、テンテンのズボンも完全に脱がせた。

「あ……、あう……？」

未だに絶頂の余韻で意識を朦朧とさせているテンテンは、脚を開かれても虚ろな目で空を見上げているだけで反応を示さない。

俺はテンテンの股間へ腰を差し込み、愛液に塗れたショーツを尻の方から脱がす。

大陰唇どころか股間周辺にまで広がっていた愛液は、卑猥な体液の糸となってクロッチと秘裂を繋げた。

厭らしい光景と共に、包んでいた布から開放された所為で性的に興奮を増加させる濃いねっとりとした匂いが漂ってくる。

それを嗅いだ俺は陰茎の硬さを最大にさせ、鼻息も荒くしてしまう。

まさしく女の武器に囚われた俺の思考は、既にテンテンを犯す事しか考えられなかった。



「んくっ、ふう、はあ……！」

「あっ……うっ……？」

身体を近付けた事で顔に影が掛かったテンテンは、戻りつつあった意識でダルそうに自分の下半身へ目をやる。

視線の先では俺が陰茎を持って角度を抑え、今にも秘裂へ差し込もうとしている光景が見えるものの、絶頂の余韻で朦朧としている意識ではハッキリと認識出来ない。

しかしそれも一瞬で収まると、慌てて俺を押し退けようと手を伸ばしてきた。

「ちょっ！　ちょつと！　そこまでするの！？」

「男の武器を理解する為にも、実際に女の武器で包み込み必要があるんだ、よ！」

「んきうっ！？」

好い加減我慢の限界だった俺は、制止を求めるテンテンを無視して無理矢理腰を差し入れる。

大きな絶頂で既に解れていたテンテンの膣口は、限界まで硬くなった俺の亀頭を難なく通過させた。

ただでさえ愛液でヌルヌルになった上、直前に絶頂を経験した所為で処女の締め付けは殆ど感じない。

それでも蕩けた膣内はヒダを滑らせながら侵入して来た亀頭を舐め回す。

処女膜の抵抗は一瞬で消えてしまい、亀頭だけではなく竿までも膣口へ減り込んでいった。

「んあぁっ！！？」

「おふぁっ！」

俺の胸に手を当てて押し返そうとするテンテンも絶頂で敏感になっていた膣内を、指よりも大きな陰茎で広げられる感覚に背中を反らせて悶絶する。

膣内からの違和感に抵抗を示す下半身は急速に増加する胎内の違和感で力が入り、太股はグッと緊張を見せた。

膝は曲げられて足の指は硬く握り締められる。

広げられていた脚は反射的に内側へ閉じようと動くも、俺の腰に阻まれてそれも叶わない。

膣壁は何とか陰茎の挿入を阻もうと亀頭の前にヒダを集めるが、絶頂で力が抜けているので柔らかい抵抗を返すだけに終わる。

対照的に俺は解れた膣壁で陰茎を舐められる刺激を受け、高まった快感を更に高めた。

俺が腰を押し入れれば、隙間の無くなった膣内から愛液が逆流してくる。

少女らしさを残す程度に成長したヒダは心成しか厚く、侵入して来た陰茎を受け入れた。

膣内にとっては精一杯の拒絶を示しているだろうが、一度意識を飛ばす程の快感を受けた所為で結果的に陰茎をヒダで舐め回すだけ。

鈴口の先で壁となっていた膣壁が亀頭によって広げられれば、愛液に塗れるヒダが滑る。

後続く竿へも張り付いたヒダからは、細かい筈の凹凸すら感じられる締め付けを受けた。

「んくう！？ お腹の中が、ひい、広がるう……！！」

「おふうっ……！！」

そして亀頭の先が膣壁とは違った固めの感触にぶつかり、俺の下腹部もテンテンの股間へ密着する。

陰茎は大陰唇を巻き込みつつも完全に膣内へ入り、熱く蠢きながら陰茎を滑る感触に包まれた。

動かなくてもテンテンが呼吸するだけで膣壁は引き上げられ、陰茎は僅かに擦られる。

亀頭の凹みに入ったヒダも一緒になって上に行くので、扱かれているようにも感じられた。

「うっ、動くぞ！」

「ふあっ！？　だ、駄目！　今は！　あ  
あ！！？」

膣内の違和感も快感として受け止め始めていたテンテンに構わず、俺は腰を引いく。

全て挿入した状態から引き抜くと、陰茎が根元から鈴口までを滑るヒダが一気に流れた。

カリは膣壁を削り、微かに残っていた処女膜さえも取り去る。

秘裂から姿を現した太い血管が脈打つ竿には、愛液で薄まってはいるが確かに破瓜の血が付着していた。

膣内の最奥に鈴口から出たカウパー液を残し、亀頭が膣口から出る寸前まで引き抜く。

「ふっ！！」

「ふあっ！？」

再度、一気に最奥まで突き上げればテンテンは短い嬌声を放った。

背中とは反らされたままなので、天へ向けられた胸は不安定に大きく揺れ動く。

陰茎が出て行って元の締まりを取り戻そうとし

ていた所に亀頭を突き入れ、即座に膣壁を押し広げた。

最奥では鈴口が子宮口に衝突し、カウパー液を塗り付ける。

根元まで差し込んだ陰茎を抜いてから素早くテンテンの腰を掴んで股間を引き寄せ、下腹部が股間へぶつかるとう腰を離す。

「ふっ！ はっ！ くっ！！」

「んっ！ あうっ！！ お腹の、奥がっ！！」

ピストン運動を開始すれば、テンテンは膣内を犯される快感で自分の胸を抱き締めた。

胸は腕に押さえられるが、俺が腰を使えば上下に



食み出た部分の肉が柔らかく波打つ。

陰茎が膣壁を広げながら動き程に、愛液がグチョグチョと鳴り響く。

ヒダから受ける抵抗も大きくなり、膣内が興奮で熱さを増しているようだった。

断続的な締め付けに陰茎から受ける快感が増大し、前後に動く腰も乱暴に強くなっていく。

「くっ！ んっ！ はっ！」

「あぁっ！ んぐっ！ はうっ！！」

犯されるテンテンは膣内を突き上げられる快感で思考を止め、無意識に身体をうねらせる。

蟹股に開いている股間すら動かすので亀頭が触れる場所も頻繁に変わり、犯す側の俺にも新しい刺激を送った。

子宮口の周りでカウパー液と愛液が混ぜられ、更には陰茎に掻き回される所為で空気を含んで白く泡立つ愛液。

カりに受ける抵抗は激しい痙攣を繰り返す締め付けに変わり、テンテンも二度目の絶頂へ上っていく。

「うっ！ ふっ！！ で、出そうだ！」

「うあっ！？ ま、待って！ 中じゃ、駄目よ！」

「くうっ！！」

「ひぎうっ！！？」

もはや陰茎からの欲求に支配された俺は外からの言葉に意思を向ける余裕は無く、本能の赴くままに膣内を犯す。

大き過ぎる快感から逃げようとする腰を掴んで引き寄せては微妙に位置を変え、陰茎が抉る角度を変えた。

絶頂に至る程の快感を溜め込んだテンテンも、俺の激しい腰の動きで全身を小刻みに痙攣させる。

しかしテンテンの快楽に犯されていない心の奥では、一方的に攻められる現状を悔しく思い、半ば無意識に下半身へ重点的に力を加えた。

「くふっ！？ し、まる！！？」

「あっ！ ああっ！ 違うの！ これは！ あ

あっ！！」

射精の予感を尿道で留めていた陰茎は、膣内の締め付けで絶頂を迎える。v 咄嗟に最奥を付いた状態で腰を止め、股間から力を抜いた。

「出るっ！！」

「ふああっ！！ 出て、るうっ！！？」

解く放たれた精液の濁流は尿道を勢い良く通り、テンテンの子宮口へ直接張り付く。

我慢を重ねた事で粘度が高まっており、ドロリとした精液が絶頂の快感と共に鈴口から駆け抜けた。

そして膣内の最奥で熱い体液の感触を受けたテンテンも、溜まりに溜まった快感を開放する。

「ふっ！ ふああっ！！！」

「んおおっ！？」

絶頂で背中を反らせるテンテンの膣内では、痙攣を止める代わりに今まで以上に強く陰茎を締め付けてきた。

それこそ、射精で陰茎が上下に痙攣を繰り返していても、動きを止める勢いでギュッと膣壁が握り締める。

愛液に塗れるヒダはそれでも肌を滑るので、精液を吐き出す勢いも強めてしまう。

陰莖を根元まで咥え込んだままテンテンは腰を震わせ、絶頂の快樂が股間から脳を焦がした。

暫く射精を繰り返していけば徐々に絶頂の波も収まっていき、テンテンは反らせていた背中をゆっくりと地面へ下ろす。

「おふう……」

「あ……ああ……」

思う存分に精液を出し切った俺は大きく息を吐き、掴んでいた女の子らしい細い腰から手を離れた。

腰を開放されたテンテンは未だに虚ろな目を空へ向けたままであり、足は蟹股で力無く開かれた

まま。

自分の胸を抱き締めていた腕が身体の横へ落ち、胴体は荒い呼吸の度に上下に動く。

胸は突き上げていた時よりは揺れ幅が小さいものの、乳首は快感の余韻で固さを保っていた。

「あっ……中に、出すなんて……」

「んふう、まあ、女の武器を磨く為には中に出す必要があったしな」

「んくう……信じる、わよ……？」

虚ろだった視線に、恨めし気な感情を込めて俺へ視線を向けるテンテン。

俺が適当な理由で取り繕うと、テンテンは事前にガイから聞かされていた情報を元に信じる事にしたらしい。

と言うか、信じなければ犯された意味が無くなると思ったのか。

何にせよ、俺は満足したので腰を引いて陰茎を抜いていく。

「んあ……」

「おうふ……」

完全に身体を離せば、開放された膣口から粘度の高い精液がねっとりとして出てきた。

テンテンは気だるげに上半身を起こすと、股間の



惨状を見て呆れた雰囲気を出す。

「こんなに出さなくても、んっ、良いじゃない」

「いやなに、テンテンの女の武器が凄かったからな」

「……………本当に修行の成果？」

「成果だよ」

ジト目で俺を見るテンテン。

俺は俺で体液に濡れた陰茎を拭いていき、それを見たテンテンも隣に放置してあった自分のズボンから手拭いを出して股間を拭いていく。

少し離れた所でもガイとネジ達の戦闘も終わり

かけているようで、始めた時には良く聞こえていた激しい音が収まりつつあった。

「……ふう」

「……まあ、こんなものかしら？ え〜っと、パンツは……」

下半身を綺麗にしてズボンを履いた俺は、ガイが笑いながらネジを弾き飛ばしている光景を目撃する。

「はっはっはっ！ 甘いぞ、ネジ！」

「がはっ！？」

土煙を派手に巻き上がらせ、ネジは倒れているリーの隣へ落ちた。

何気に普通なら重傷を負っていても可笑しくない音が響いたが、ネジとリーは荒く呼吸を繰り返している以外には目立った怪我をしていない様子だ。

精々僅かに血が滲んでいる程度で、軽い掠り傷だけで済んでいる。

「そんな事ではこの俺は倒せんぞ〜？」

「くっ、流石です。ガイ先生……！」

「くそっ……！」

流石の上忍と言った所か、親指を立ててサムズアップをするガイは汗も掻いていない。

ただ暑苦しい空気は増大しており、同じ班でなければ近付きたくない笑顔だった。

テンテンも服装を整えると俺の隣で座り、暑苦しいガイを嫌そうに見詰めている。

「おっ！ テンテン達も修行が終わったのか！」

「私の圧勝でしたけどね」

「まあ、俺は知識専門だから」

「はっはっはっ！ どんな相手でも、戦ったと言う経験は裏切らないぞ！」

余りにも歯応えが無かった俺を横目で見てくるテンテンだが、確かに戦ったと言う経験は積んだ。

しかしガイ達の修行風景を見てしまえば、俺は明らかに対戦相手としては力不足だっただろう。

「さて、そろそろ昼だから、お前は次に行く時間だな」

「あっ、そうですね」

暑苦しく汗を拭うふりをしたガイは、太陽を見て時間を判断する。

俺は元々遊撃要員なので、時間によって色々回る必要があるのだ。

普通なら一日は同じ班で動く手筈であるものの、中忍試験を間近に控えている今は日程を縮めて回している。

「そうなの？ あんまりころころ班を変えてたらメンバーも遣り辛くなるんじゃない？」

「その遣り辛さの中で任務をする事に慣れる為らしいぞ？」

「ああ、なるほどね」

納得したテンテンを置いて立ち上がった俺は、早速次の班の元へ向かう。

「今日の内容はちゃんと伝えて貰うから心配す

るなよ！」

「……？ 報告って、担当した上忍の仕事じゃなかったですか？」

「はっはっはっ！ 頼んだぞ。テンテン！」

「あっ、はい。……えっ？」

思わず返事をしてしまったテンテンは唾然とガイを見上げた。

どちらにしろ俺は報告しなくても良いので、この際テンテンに押し付けてサッサと去らせて貰おう。

「それじゃ、報告はよろしくな。テンテン」

「えっ？ ちょっと！」

慌てるテンテンの声を背中に受けながら、俺は逃げるように広場から出て行く。

△

次の集合場所は、里の門の前。

巨大な木製の門には片方に「あ」の文字が、もう片方には「ん」の文字がデカデカと書かれている。



次の俺の任務はアスマ班に合流し、他の町に潜伏している賊集団を捕らえる事だ。

珍しく訓練ではないので、俺も少し気を張る必要があるかもしれない。

しかし集合場所の門に着いても誰も見当たらず、人の気配も僅かしか感じられなかった。

「.....時間は合ってるよな？　もしかして置いて行かれたか？」

何気にアカデミーでも友人と言う存在が居なかった分、寂しい気持ちが湧き上がって来そうだ。

不安に駆られて周辺を見回していると、後ろから待望の声が聞こえてきた。

「早いな。もう来てたのか」

「あっ、お世話になります」

門の中から出てきたのは、揉み上げから顎まで鬘を繋げている男<猿飛 アスマ>

タバコの似合う男で、三代目火影の猿飛ヒルゼンの息子。

実力に関しては天才忍者と言われる、はたけカカシと並ぶ人物だ。

「また、めんどくせえ任務を受けたもんだな」

その後ろに付いてくるのは三人の下忍達。

オールバックの髪を後ろで結び上げ、心底やる気の無さそうな目をしてダラダラ歩いているのは  
＜奈良 シカマル＞

他の二人のリーダー的な存在であり、その知略は下忍の枠には収まらない程に優秀だ。

本気を出せば上忍であっても手玉に取れるだろう。

「でも、これも下忍の内に経験しておいた方が良  
いって言ってたよ」

隣でスナック菓子を貪っている小太りは＜秋道  
チョウジ＞

太っているにも拘らず、実際に太っていると指摘されると怒るデブである。

何よりも髪型が可笑しく、言うなればブルマを頭に被っている感じだ。

「まっ、私達には文句を言える程の経験は無いしね。少し先を見据えた訓練と思えば良いんじゃない？」

チョウジの言葉を後押しするように言ったのは  
<山中 いの>

薄い黄色の髪をポニーテールで纏めているが、右の前髪だけ長く顔に掛かって顎まで隠していた。

全体的に紫色の服は袖が無く、丈も短い。

服の下から見えている腹にはサラシが巻かれ、忍者らしく鍛えられて引き締まった腰は完全に見えている。

下半身はスカートを履いているものの、左右に入った切れ目は殆ど腰まで伸びている所為で前と後ろしか隠せていない。

激しく動けばすぐに股間が見えそうであっても、スパッツのように巻いているサラシがズボンの代わりなのだろうか。

何にせよ、逆に厭らしい雰囲気を感じる。

「遅れて済まんな」

「いえ、俺も来たばかりですから」

「そうか」

俺の答えを聞いて好印象を持ちそうな笑顔で答えるアスマ。

間違ってもガイのような暑苦しさは無い。

「それじゃ、今回の任務を改めて教えとくぞ」

俺を含めてシカマル達が並ぶと、アスマは腰に手を当てて真面目な表情を浮かべた。

「今回の任務は盗賊のアジトを探る事だ」

「やっぱり、めんどくせえ任務だな」

「私達に来るって事は、盗賊も忍者だったりするんですか？」

「ああ、いのの言うとおりに、盗賊は忍者崩れらしい。町の警備兵では手に負えないから任務として依頼が来たって所だ」

普通の町の住人では、忍術を使う相手は分が悪いだろう。

警備兵になる為、多少鍛えても一般人の枠組みから出る身体能力を得られる筈も無い。

忍者が使うチャクラは、普通の人間の努力をアッサリと凌駕する力を持つ。

「でも、相手が忍者って、下忍の私達で相手にな

ったりするもんですか？」

「まあ、いのの心配も分かるけどな。この任務は試験へ向けた小手調べと思ってくれた方が良さだろうな」

なにやら企みを含んでいそうな顔で言うアスマに、シカマルが嫌そうな表情を浮かべた。

「試験って……。まさか中忍試験の事じゃないだろうな？」

「流石シカマルだなあ。正解だ」

「中忍試験って！ 私達ついこの間アカデミーを卒業した下忍ですよ！？」

「そ、そうだよ！」



アスマの言葉に慌てたのは、いのとチョウジ。

流石に自分達が未熟である事はシツカリと自覚しているらしい。

それでもアスマはシカマル達一人一人に視線を合わせ、安心させるように笑みを浮かべる。

「大丈夫だ。確かに気が早いかもしれないが、お前達は中忍試験に挑戦する実力は十分にある」

「ちっ……」

「えっ、そ、そうですか？」

「そう言われるとそんな気がしてきた！」

舌打ちをしたシカマルだったが、先程まで漂わせていた面倒臭そうな雰囲気は僅かに和らいでいた。

決して乗り気では無さそうではあるものの、やはり褒められて嫌な気分はしないのだろう。

いのとチョウジは分かり易く煽てられて、随分とやる気を見せていた。

俺は部外者なので自然と蚊帳の外になってしまうも、一人黙っている姿を見たいのは、ニヤけていた顔を鎮めてアスマへ顔を向ける。

「じゃ、こっちはどうなんですか？」

そう言って、いのが指差したのは俺。

アスマも俺の今後を聞いていなかったようで、班員だけで盛り上がっていた事もあるって少し気まずそうに答えてくる。

「それは火影様の受け持ちだから、正直分かん

「ああ、別に俺は中忍試験を受けたい訳じゃないですから」

「俺もお前みたいなポジションに居たいぜ……」

「んもう！ シカマルってばいっつもそんな事ばかり言って！」

一見、空気を呼んでいないとも思えるシカマルの

言葉のお陰で、微妙に硬くなってしまった場の空気が和らいだ。

シカマルも任務前に班員同士の壁があっては困ると踏んだのか。

何にせよ、下忍一策士であるシカマルの言葉によって、俺とアスマ班の間にあった初対面の壁は僅かに薄くなった気がする。

アスマもシカマルの気遣いを察しており、視線で礼を言っている雰囲気を見せていた。

「.....ちっ、めんどくせえ」

「シカマル！ 聞いているの？」

「ああ、はいはい」

いのはシカマルのフォローに気が着いている様子は無く、チョウジは暢気にスナック菓子の袋を漁っている。

「さて、そろそろ任務に行くぞ」

「あっ、はい！ 分かりました」

「はあ、めんどくせえなあ……」

「もぐもぐ……」

「分かりました」

場の空気を仕切りなおし、早速目的地へ向かって歩き出したアスマ。

俺とシカマル達も後ろに続いて歩き出す。

昼過ぎの春らしい風は心地良く、ただ歩いているだけでも楽しい気分が湧き上がって来そうだ。

任務は日帰りではないので、ちょっとした旅行とも言えるかもしれない。

シカマルはダラダラと歩き、チョウジはスナック菓子を食べているので自然と俺はいのとは多く時間があつた。

「へえ、そうなんだ」

「ああ、実際は元クラスメイト達専門の負荷人員だろうけどな」

「まあ、変に四人に増やしても、動かし難いんじゃないかしら？」

「それを何とかするのが上司じゃないのか？」

「ああ……。アスマ先生、そうなんですか？」

「おっ！？ お、おお、任せておけ。シカマルが何とかしてくれるから」

「おい、面倒事を押し付けるなよ」

臨時に入っているとは言え、班員との壁を無くそうとするのがアスマをからかいつつ、任務地への道をひたすら歩く。

サスケの事以外では面倒見の良いいのは、積極的に俺と交流を図ってきた。

俺も断る理由も無く、普通の顔見知り程度には交友を結べた感じだ。

そんなこんなで、たいして代わり映えしない道す

がら、夕暮れに差し掛かった頃には目的地である町に着いた。

「さて、一旦予約してある宿に入ってから、盗賊を探す予定だが.....シカマル」

「あん？」

「作戦はお前に任せるぞ」

「.....なんでだよ」

敵が忍者であるにも拘らず、実力も太鼓判を押される程の上忍が下忍である自分に丸投げした事で、シカマルはジト目を返す。

しかしアスマは信用している笑顔を浮かべ、意見を変える様子は見せない。



仕方なくシカマルはいのとチョウジへ助けを求めて顔を向けるも、期待したものは正反対の言葉が飛んでくる。

「作戦を考えるのがシカマルなら大丈夫よ」

「そうだね。シカマル、頑張れ！」

「お前ら……」

いっそ清々しい笑顔すら浮かべるいのとチョウジ。

最後に残った俺にも顔を向けてくるので、先程の恩を返す為に一応アスマへ意見を言う。

「でも、アスマ先生。流石に下忍が行き成り実践の作戦を考えるのは、キツイんじゃないですか？」

「ああ、それも大丈夫だ」

「何ですか？」

「うん、シカマルはな、本気を出して思考を巡らせれば、どんな逆境でも活路を見出すからな」

「へえ」

「普段、将棋の相手をして貰ってるが、どんなに追い詰めても一度も勝てた事が無いんだよ」

あっ、駄目だ、これ。

もうアスマの中で、シカマルの株は中忍に合格し

た勢いだ。

勝てた事が無いと言って浮かべる嬉しそうな表情も、それを物語っている。

普段シカマルは何気に外堀を埋められないと動かない事が多い所為で、今日は行き成り外堀を埋めたらしい。

いのとチョウジは勿論だが、俺も反論する理由が見つからない。

なので、視線で何となく謝るとシカマルも察して顔を背け、小さく舌打ちをした。

「.....ちっ、使えねえ」

すまんの。

「それでシカマル。作戦はどうするのよ？」

「ああ？ ……そうだな」

スッカリ外堀を埋められたシカマルは、いのの質問に頭をガシガシと掻きながら答える。

「定石で言えば、いのの心転身の術で盗賊の一人を乗っ取って、アジトに案内させるのが良いだろうな」

「まあ、そうだよな」

「だけど、その間の私の身体はどうするのよ」

心転身の術はいのが得意とする忍術。

自身の精神を飛ばす事で相手の身体を乗っ取る事が出来る、大変使い勝手の良い忍術だ。

ただ乗り移っている状態で、乗り移っている人間が攻撃を受けると精神を飛ばして眠っている本体も同様に傷を受ける欠点もある。

シカマルの作戦内容に同意したチョウジの後に続きたいのは、至極最もな問題を投げかけた。

「それは、こいつを宿に残らせて守らせれば良いじゃないか」

思いの外、心配はアッサリと返される。

シカマルが面倒臭そうに俺を指差せば、いのも釣られて俺へ顔を向けた。

それを見た俺は、咄嗟の判断でフィールドを展開する。

「……………まあ、それなら安心……かな？」

何処か複雑そうに納得したいの。

幾ら道中仲良さ気に会話をしていても、流石に初対面の異性に自分の無防備な状態を任せるのは無用心すぎる。

事前にいのは女の子としての警戒心は人並みに持っているとは踏んだので、咄嗟に俺への信用をフィールドで深めたのだ。

結果はご覧の通り。

初対面で自分と同じ歳の男である俺へ、自分の身体を預ける事に納得してしまった。

「俺は別に良いですよ。それにシカマル達に対しても戦闘ではいつものメンバーでした方が良いでしょうし」

「良し！ なら、シカマルの案で行こう」

「はい！」

「分かりました！」

「.....はあ」

いのとチョウジの張り切る声の後にはシカマルの溜息が続いたが、作戦は早速決行される。

と言っても、最初にする事は宿の部屋へ行く事で、そこから見える道に盗賊が二人ほど良く現れるらしい。

そして発見し次第、シカマルの作戦通り、いのが心転身の術で後ろに居る方の身体を奪取。

後はいののサポートをする為に、アスマを始めとしたシカマルとチョウジが密かに護衛をしつつ、前を歩いている盗賊に着いて行ってアジトを発見する流れだった。

「目標の写真を渡しておくから確認しておけ」

俺達四人に渡されたのは二枚の写真。



若干厚めに感じる和紙に印刷された顔は普通の一般人の雰囲気を感じるが、目だけは明らかに犯罪をしてそうな鋭さを持っている。

如何にも隠し撮りをしましたと言わんばかりの角度だが、顔を確認するには問題ない。

「宿は事前に町の偉い方が手配してくれてるから、多少騒ぎを起こしても目を瞑ってくれるが、まあ、程々にな」

「はい！ アスマ先生！ 高い部屋ですか？」

「いや、広いらしいが普通の部屋だと聞いているぞ」

「ええ、残念」

見るからにテンションが下がるいの。

その様子を見たアスマは苦笑を返してから、身を翻すと町へ入っていった。

暫く賑やかな町の中を歩いて目的の宿に到着し、予約してあった部屋へ向かう。

「普通だな」

「任務の待機場所と考えれば、無難よね」

「お腹空いた……」

「さて、お前ら。盗賊が通るのは宿の目の前の道だから、交代で監視しろ」

「了解」

「まっ、気負わずにやれ」

「へいへい」

気だるげに返事を返したシカマルはそのまま窓へ近付き、窓枠に付けられている障子を少し開けてから目の前の道へ視線を降ろした。

チョウジは備え付けられている菓子を貪り始め、いのは低い机の前へ座ってお茶を入れる。

俺も机の近くへ座るも、特にやる事は無いので目の前で茶を入れるいのをそれとなく視姦する事にした。

せっせと急須に茶葉と湯を入れ、軽く急須を振るといのは胸も柔らかく左右に揺れる。

長い髪は僅かに動くだけでも俺の方へ良い香りを飛ばしてきた。

いのも紛れも無い美少女であるし、胸も結構膨らんでいる。

流石にヒナタ程ではないみたいだが、確実にテンテンよりは大きそうだ。

余り性欲を滲ませた視線をいのへ向けていると上忍であるアスマへ目的が知られそうなので、念の為に俺の行動を気にしないようにする効果を入れてフィールドを張っておく。

「アスマ先生。はい、どうぞ」

「おっ、すまん」

座って一服をしているアスマへ湯飲みを差し出すと、窓際で監視を続けるシカマルにも声を掛け

る。

「シカマルは要る？」

「いや、そんな暇は無さそうだぞ？」

「えっ？」

「いの、出番だ」

「もう来たの！？」

「ええ！？ 座ったばかりだよ！」

「文句は盗賊に言ってくれ。それよりいのは早く心転身の術を」

「え、ええ。分かった」

茶を入れかけていた手を止め、急いで窓枠に居たシカマルの隣へ行くと、開いた障子の隙間から目の前の道路を見下ろす。

夕日の赤い光が掛かる道を見たいのは、視線を忙しく動かして目標を探した。

「どれ？」

「ほら、あいつだ」

シカマルが懐から写真を出して見せると、歩いている目標を指差す。

それを受け、いのは目的の人物を確認してから素早く印を組んで術を発動させる。

「あいつね……。『心転身の術』！」

途端に、いのの身体は崩れ落ちてシカマルに支えられ、そのまま畳みの上へ寝かされた。

タバコを吸っていたアスマも、表情を引き締めて様子を見ている。

「シカマル、上手く行ったか？」

「ああ、流石いのだ」

「そうか。それじゃ行くとするか」

「チョウジ、いつまで食ってるんだ。行くぞ」

「うん、分かったよ！ シカマル」

答えを聞いたアスマはタバコを啜えたままで立ち上がった。v シカマルも菓子を貪っていたチョウジへ声を掛けて部屋の出口へ向かう。

襖を開けて出て行く間際、臨時の班員である俺へ振り返って指示を出してきた。

「いのを守れよ」

いつに無く真剣な顔をして言ってくるシカマルに、俺も真面目な顔をして答える。



「分かってるって。任せろ」

「もしも、怪我をさせたら影真似の術で全裸にして里を一周させるからな」

「お、おお」

そして、出て行くシカマル達。

部屋に残されたのは、心転身の術で精神を飛ばして眠るいののの身体と俺一人。

ごく一瞬のチャンスを物にして手に入れた時間は、俺の沸き上がる興奮を一気に高めた。

窓から外を走り去るシカマル達を確認すると、俺は近くで寝かされているいののの身体へ近付く。

(ここからは体験版専用です)

すやすやと眠るいのの胸は規則正しく上下に動いている。

改めて見れば、やはり美少女。

原作では脇役のポジションであっても、その魅力は十分にあった。

しかし俺は手を出す前に一つの考えが浮かび、おもむろに自分の目へ気を送る。

ある程度溜めてから目を見開き、必殺技を放った。

「……外道照身靈波光線（げどうしょうしんれいはこうせん）！」

「ぐわ〜！」

「正体見たり！ 前世魔神！」

技の名前を叫ぶと同時に俺の目から光が放たれ、意識を飛ばしていた筈のいののを強制的に目覚めさせる。

交戦を浴びた、いのだった人物は棒読みで苦しんだ後に一瞬で正体を現し、少女だった体格が大人の女へ代わった。

「お前は……確かに見た事があるな」

「……………覚えているのね」

金髪だった髪は腰まである長い黒髪に変わり、顔も優しげな表情を浮かべて俺を見詰めている。ジーンズに包まれる脚は長く、胸も大きい。その姿を見た俺の心には懐かしい思いが沸き上がって来た。

「ああ、覚えてる」

そう、俺は過去に色々な世界へ降り立っているのだ。

魔法が普通に存在するファンタジーの世界や、ロボットが兵器として活用されている世界。

俺が元居た世界と変わらなくとも、一人の少女が神として裏から監視されている世界。

さまざまな世界を経験し、何度も目の前の女に新しい世界へ飛ばされた。

だが、女は俺の言葉を何処か疑っている雰囲気を出しているのです、忘れていた一番大事なキーワー

ドを言う。

「『可能性』 だろ？」

「っ！？」

それを聞いた女はハッと息を飲み、驚きで目を見開いた。

次の瞬間には安心したような笑みへ変わり、目の端から一筋の涙を流す。

「本当に……覚えているのね」

「覚えている」

「そう……それじゃ、私の事は思い出した？」

「何となく想像は付いてるけど確信は無いな」

「そうなの……」

過去の記憶を持っていると知った女は目に期待を滲ませているが、俺の答えを聞いて僅かに残念そうな色を含んだ。

「あと少しだ。たぶん次を終えたらきっと全部思い出す」

「……分かったわ。信じてる」

そして女はグッと手を握ってから指を開いて俺へ突き出してきた。

掌から出てくる優しい光が『NARUTO』の世界に広がり、ゆっくりと周りの光景が崩れていく。宿屋の壁から襖に机まで、色が消えてポリゴンのような線で構成された立体へと変わる。

遂には立っていた床さえも消え、俺は次の世界へ向かいつつある事を理解した。

「必ず次で思い出すから、待っててくれ」

「ええ、待ってるわ。いつでも……いつまでも待ってるから！」

俺を信じてくれる女の為に。

待っていてくれる女の為に。

俺は『可能性』を信じて目を閉じる。

愛しい女の顔と声に心を満たされながら、暫く空間を落ちていると不意に足の裏に地面の感触が復活した。

「……次はここか」

目を開けた先には見慣れた現代風の町だが、感じる空気は確実に俺が居た世界とは違う事を証明していた。

「それじゃ、行くか！」

俺の足取りは軽く、何よりもやる気が満ちている。もう、何も怖くない。

体験版終わり